

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり



特集 ■ 平成 22 年度
地域づくり総務大臣表彰

3

2011

ISSN 1340-8917



市中心部にある黒壁スクエアの黒壁ガラス館

浅井の歴史や文化、産業を知ることができる
浅井歴史民俗資料館「お市の里」昭和58年に市民の熱意と寄付金などで建設
された長浜城歴史博物館

長浜鉄道スクエアで展示されている蒸気機関車

- 1 巻頭エッセー ● みんなでつくろう、愛顔（えがお）あふれる愛媛県
中村時広（愛媛県知事）

特集 平成22年度 地域づくり総務大臣表彰

- 4 平成22年度 地域づくり総務大臣表彰
大賞は高知県馬路村の東谷氏一三十三団体と八個人の功績たたえるー

大賞〈1名〉

- 東谷望史氏【高知県馬路村】6

優秀賞〈計2団体〉

- 三重県多気町及び県立相可高等学校【三重県多気町】8 ●株式会社四万十ドラマ【高知県四万十町】9

団体表彰〈計23団体〉

- 株式会社エフエムもえる【北海道留萌市】10 ●洞爺国際交流協会【北海道洞爺湖町】11
●NPO法人清水町アイスホッケー協会【北海道清水町】12 ●NPO法人尾上蔵保存利活用促進会【青森県平川市】13 ●千蔵夜市実行委員会【岩手県一関市】14 ●協同組合仙台卸商センター【宮城県仙台市】15 ●JA秋田ふるさと青年部【秋田県横手市】16 ●庄内映画村株式会社【山形県鶴岡市】17 ●NPO法人アンプ【山形県新庄市】18 ●ながい黒獅子まつり実行委員会【山形県長井市】19 ●NPO法人川越蔵の会【埼玉県川越市】20 ●映画製作会社FireWorks【東京都北区】21 ●葛西さざなみ会【東京都江戸川区】22 ●NPO法人子育てコンビニ【東京都三鷹市】23 ●くろべ漁業協同組合【富山県黒部市】24 ●NPO法人小谷山村留学育成会【長野県小谷村】25 ●木綿街道振興会【島根県出雲市】26 ●NPO法人こやだいら【徳島県美馬市】27 ●株式会社やまびこ【愛媛県四国中央市】28 ●伊予農希少植物群保全プロジェクトチーム【愛媛県伊予市】29 ●NPO法人鳳雛塾【佐賀県佐賀市】30 ●NPO法人ハットウ・オンパク【大分県別府市】31 ●荘園の里推進委員会【大分県豊後高田市】32

地方自治体表彰〈計6団体〉

- 茨城県桜川市【茨城県】33 ●神奈川県小田原市【神奈川県】34 ●和歌山県北山村【和歌山県】35 ●和歌山県田辺市【和歌山県】36 ●島根県飯南町【島根県】37 ●高知県・高知県奈半利町・大月町商工会【高知県】38

個人表彰〈計7名〉

- 野老真理子氏【千葉県大網白里町】39 ●清水康之氏【東京都千代田区】40 ●宮治勇輔氏【東京都港区】41 ●大野長一郎氏【石川県珠洲市】42 ●数馬嘉雄氏【石川県能登町】43 ●水野龍二氏【長野県池田町】44 ●江崎貴久氏【三重県鳥羽市】45

奨励賞〈計2団体〉

- 十和田バラ焼きゼミナール【青森県十和田市】46 ●さくら座【山梨県山梨市】47

レギュラーレポート

活力ある地域づくり支援事業（岩手県八幡平市）

48 ものづくり体験で観光誘客を図る

高橋一夫

51 首長の思い 市民みんなで町の魅力を磨く

大橋建一（和歌山市長）

52 センター通信

グラビア

- 2 平成22年度 地域づくり総務大臣表彰
50 手前みそですが…●新潟県新発田市



浅井家ゆかりの小谷城跡

●表紙Ⅱ長浜歴ドラ隊（江・浅井三姉妹博覧会）
（滋賀県長浜市）
滋賀県長浜市で開催されている「江・浅井三姉妹博覧会」の「長浜歴ドラ隊」が二月十日、東京都墨田区にある東京都江戸東京博物館を訪れ、博覧会や地元の魅力をPRした。博覧会は一月十五日から十二月四日までの間、NHK大河ドラマ「江」姫たちの戦国」の放映に合わせて、市内の三つのパビリオン会場で江浅井家三姉妹の数奇な生涯を紹介している。
歴ドラ隊は、全国から公募した二十代から三十代までの女性七人。期間中、それぞれ戦国武将の浅井長政、妻の市、三姉妹（茶々、初江）、侍女、家来の役となり、博覧会会場や全国のイベント会場を駆け巡り、PRに努めている女性。
歴ドラ隊の地元、長浜市は琵琶湖の北部に面する人口約十二万五千人の都市。市内には、浅井家や豊臣秀吉ゆかりの名所旧跡のほか、黒壁スクエア、長浜鉄道スクエアなどの観光名所が多い。
●文Ⅱ古閑 ●カメラⅡ小形又男



みんなでつくろう、 愛顔（えがお）あふれる愛媛県

愛媛県知事 ● 中村時広

私は、昨年十二月一日に愛媛県知事に就任して以来、地方分権推進や行財政改革、地域活性化をはじめ、県政を取り巻く諸課題の解決に向け、全力で取り組んでいるところです。

知事就任に当たっては、『みんなでつくろう、愛顔（えがお）あふれる愛媛県』をスローガンに掲げました。

この「みんなでつくろう」という言葉には、地域をつくる故郷づくりは、住民の皆さんが主人公であるという気持ちを強く表しています。

また、あえて「愛」の字を使った「愛顔（えがお）」の一語には、二つの思いを込めております。一つは明日を信じる前向きな気持ちから生まれる「笑顔」、そして支え合いの原点である思いやりから生まれる「愛」、これらの意味を集約しています。

世界的な経済の停滞や少子高齢化の進展など、今日の大きな社会情勢の変化を乗り越え、故郷づくりを進めるため、県民の皆さんと一緒に、知恵と工夫を凝らしながら、「愛顔」で、愛媛が持つ魅力を最大限に発揮し、未来を切り開いて参りたいと考えております。

本県は、災害が少なく、気候も温暖で、農林水産物にも恵まれた、国内でも屈指の暮らしやすい地域であるほか、県内の東から「東予」「中予」「南予」と呼ばれる地域ごとに、東予が二次産業、中予が三次産業、南予が一次産業と、それぞれ特色ある産業が広がりを見せています。全国でも、これほど産業の色合い、キャラクターが、地域によって明確で、バランスのとれた県は珍しく、このことは、愛媛のさらなる発展につながるものと確信しています。

例えば、東予は、紙、パルプ、電機、造船、タオルなど全国トップクラスの工業力を誇り、高い技術を持った中小企業群と関連産業が集積しています。今後は、各企

業に蓄積されている技術を活用した新たなものづくりを生み出すために、技術力のデータベース化を行い、それを国内外に紹介する、県を窓口としたワンストップサービスの構築を図ります。

私も、商社勤務の経験を生かし、東予地域の産業力と技術力を精力的にトップセールスして参りたいと考えているところです。

また、南予は、恵まれた自然や農林水産物、文化遺産など、魅力にあふれていますが、あまり知られておらず、まだまだ地域資源を活かしきれていないと感じています。東予が対外的に発信するのに対し、南予の当面の課題は、さしあたり、中予や東予の方々に、南予の魅力を再認識していただき、県内の人や物の流れを一層活発にすることです。

鯛・ブリをはじめとする全国有数の豊富な魚介類や生産高日本一の真珠のほか、高品質な柑橘類、鯛めし等の特色ある郷土料理、内子・大洲・宇和の歴史情緒ある町並み、さらには変化に富んだリアス式海岸と段々畑の景観など、多彩な魅力を積極的にPRして参ります。

それから、中予は、私が松山市長時代から取り組んできました「坂の上の雲」のまちづくりを活かし、第三次産業の活性化につなげたいと考えております。

とりわけ、観光面では、「坂の上の雲」のドラマ効果を一過性に終わらせることなく、県下全域に波及させて、リピーターを生み出すための本県観光のルート化を図ることとしています。

このように、愛媛県には、全国に誇りうる魅力がたくさんあります。そんな愛媛の「底力」を活かしながら、『愛顔あふれる愛媛県』の実現に向けて、県民の皆さんとともに、県政の推進に取り組んで参りたいと考えております。

平成22年度 地域づくり総務大臣表彰

大賞 東谷 望史氏 高知県馬路村



東谷望史氏（円内）と活気ある事務所の様子（上）、五味から見たゆずの森（右上）、ゆず祭り（右下） ● 高知県馬路村（p6-7）

優秀賞 株式会社四万十ドラマ
高知県四万十町



四万十川と地元の資源を使った特産品 ● 高知県四万十町（p9）

優秀賞 三重県多気町及び県立相可高等学校
三重県多気町



高校生たちが調理、腕前はプロ並み ● 三重県多気町（p8）



地域づくり総務大臣表彰式での全員の記念写真（上）、と表彰式の模様（下）



平成22年度 地域づくり 総務大臣表彰

大賞は高知県馬路村の東谷氏 ——三十三団体と八個人の功績たたえる——

地域の個性豊かな発想を活かし、魅力あふれる地域づくりに顕著な功績のあった地域づくり団体、民間企業、地方自治体および個人を表彰する、平成二十二年度の地域づくり総務大臣表彰が十二月二十一日、東京・千代田区のグランドアーク半蔵門で行われた。

表彰式は、逢坂誠二総務大臣政務官が受賞各団体・個人の地域づくり活動の業績や情熱をたたえ、地域人材の育成への期待や、さらなる地域活性化への寄与を願う式辞を述べた後、三十三団体と八名の個人に表彰状を授与した。

表彰式に引き続き、大賞を受賞した東谷望史氏が、高知県馬路村の特産品である「ゆず」の生産加工販売によって地域を活性化してきた取り組みを紹介した。

これに続き、▽優秀賞を受賞した株式会社四万十ドラマの、四万十川の素材を活かした商品開発による地域活性化の取り組み▽町と高校が連携し、高校生が運営するレストラン「まごの

店」を実現させた三重県多気町及び県立相可高等学校の取り組み——など、熱意ある活動発表が行われた。

平成二十二年度から優秀賞、奨励賞が新たに設けられ、表彰者数は前回の大賞（一団体）、団体表彰（二十四団体）、個人表彰（三名）の計二十五団体、三名の表彰数に比べ、八団体・五名の大幅な増となった。

選定に際しては「この地域ではこれがベストだ」「このような活動がこの地域を良くするのだ」という判断による都道府県からの推薦、地域づくり懇談会構成員からの推薦に基づき、審査が行われた。

この表彰の趣旨は「地域を良くしようとする」団体または個人を表彰するというもので、審査基準は、以下の通りである。

①他の模範となる先進的な取り組み、ユニークさや創意工夫ある取り組み、地域独自の歴史的・地理的・社会的特性を活かした取り組みな

どの先進性や独自性②活動の継続性や効果・実績の定着性③規模の拡大や内容の多様化、他地域への波及など発展性④自主性・主体性のある取り組み⑤住民と行政の協働性、住民や国、県との連携性⑥住民の満足度、地域経済の活性化、雇用の創出、新たな地域文化の創造、地域の知名度やイメージ向上などの効果⑦各表彰の種類に関しての優れた功績の有無、など。

大賞

全推薦事例の中から特に優れているものに対して授与される。今回は高知県馬路村の東谷望史氏が、個人として初めて受賞した。

優秀賞

大賞に次いで優れている者に対して授与されるもので、今回は株式会社四万十ドラマ（高知県四万十町）と三重県多気町及び県立相可高等学校が受賞した。

団体表彰

地方をより良くしようと尽力した団体を表彰するもので、「地域を良くする」という言葉には、経済の活性化や伝統文化の維持、国際交流、コ

受賞団体・受賞者一覧

大賞〈1名〉

東谷 望史氏 【高知県馬路村】

優秀賞〈計2団体〉

株式会社 四万十ドラマ 【高知県四万十町】
三重県多気町及び県立相可高等学校 【三重県多気町】

団体表彰〈計23団体〉

株式会社 エフエムもえる 【北海道留萌市】
洞爺国際交流協会 【北海道洞爺湖町】
特定非営利活動法人 清水町アイスホッケー協会 【北海道清水町】
特定非営利活動法人 尾上蔵保存利活用促進会 【青森県平川市】
千蔵夜市実行委員会 【岩手県一関市】
協同組合 仙台卸商センター 【宮城県仙台市】
J A 秋田ふるさと青年部 【秋田県横手市】
庄内映画村株式会社 【山形県鶴岡市】
特定非営利活動法人 アンブ 【山形県新庄市】
ながい黒獅子まつり実行委員会 【山形県長井市】
特定非営利活動法人 川越蔵の会 【埼玉県川越市】
映画製作会社 FireWorks 【東京都北区】
葛西さざなみ会 【東京都江戸川区】
特定非営利活動法人 子育てコンビニ 【東京都三鷹市】
くろべ漁業協同組合 【富山県黒部市】
特定非営利活動法人 小谷山村留学育成会 【長野県小谷村】
木綿街道振興会 【島根県出雲市】
特定非営利活動法人 こやだいら 【徳島県美馬市】
株式会社 やまびこ 【愛媛県四国中央市】
伊予農希少植物群保全プロジェクトチーム 【愛媛県伊予市】
特定非営利活動法人 鳳雛塾 【佐賀県佐賀市】
特定非営利活動法人 ハットウ・オンパク 【大分県別府市】
荘園の里推進委員会 【大分県豊後高田市】

地方自治体表彰〈計6団体〉

茨城県桜川市 【茨城県】
神奈川県小田原市 【神奈川県】
和歌山県北山村 【和歌山県】
和歌山県田辺市 【和歌山県】
島根県飯南町 【島根県】
高知県・高知県奈半利町・大月町商工会 【高知県】

個人表彰〈計7名〉

野老真理子氏 【千葉県大網白里町】
清水 康之氏 【東京都千代田区】
宮治 勇輔氏 【東京都港区】
大野長一郎氏 【石川県珠洲市】
数馬 嘉雄氏 【石川県能登町】
水野 龍二氏 【長野県池田町】
江崎 貴久氏 【三重県鳥羽市】

奨励賞〈計2団体〉

十和田バラ焼きゼミナール 【青森県十和田市】
さくら座 【山梨県山梨市】
合計 33団体、8名

地方自治体表彰

ミニユニティづくりなど、さまざまな解釈がある。あらかじめ細かく要件を指定すること avoidance、現場の実情を踏まえた判断を尊重し、全国二十三団体を選出した。

地方独自のプロジェクトを自ら考え、前向きに取り組む地方自治体を表彰するもので、和歌山県北山村など六団体を選出した。

個人表彰

個性豊かで活力あふれる地域づくりのため、

奨励賞

自ら率先し、地域づくりに貢献している個人を選出する。今回は大野長一郎氏（石川県珠洲市）はじめ七名が選ばれた。

地域づくりに活躍する個人を表彰することで、その功績をたたえ、地域づくりのさらなる進展を目指すのが狙い。

今後、より一層の発展が望まれる取り組みを表彰するもので、十和田バラ焼きゼミナール（青森県十和田市）とさくら座（山梨県山梨市）の二団体が選出された。

これらの表彰を通して、地域づくりへの情熱や想いを高め、豊かで活力ある地域社会の構築が図られることが期待される。



月尾嘉男座長（東京大学名誉教授）が講評

過疎地で築いた「馬路村ブランド」

うまじむら

―ユズの生産・販売で農協30年の頑張り―



馬路村農業協同組合 代表理事 組合長

平成二十二年度の「地域づくり総務大臣表彰」を受賞したのを機に、約三十年に及ぶ活動の一端を、以下にご紹介したい。振り返れば、三十年の年月は実に早かった。

神戸での宣伝販売が始まり

人口一千人ほどの馬路村で、ユズを売るために悪戦苦闘を繰り返し、気がつけば六十歳近くになり、人生の多くを地域づくり、村おこしに懸けていた。地域づくりには完成や完了といった仕上がりがない。人が住んでいる限り続く、エンドレスのドラマでもある。

その中で、多くの人たちに出会い支えられ、時には悩まされ成長をしてきたが、それは神戸大丸への宣伝販売から始まる。

前年に大豊作となったユズ。その

果汁を売るために、先輩課長と当時の組合長令によって、神戸大丸の催事に参加していた。初日、二日目と頑張るが、思ったほど売れない。

理由は催事場の端っこ、さらにトイレの前であるから、お客さまが前を通らない。言い訳はしたくないが運不運もある。そんな時、助け舟がやってきた。馬路村出身の食品係長が、人通りの多いところに特設台を準備してくれたのである。おかげで四日目には、持ってきた小瓶のユズ果汁が完売になってしまった。

喜んでいたら係長がやって来て「明日の朝までに補充して品切れにしないように」と一喝。ええっ！今から農協に電話して追送を掛けても届くのは二日後である。とにかく当時は時間がなかったのである。

考えた挙句、組合長に二時間かけ

てフェリー乗り場に運びフェリーに積んでもらうことにした。なんとか瀬戸内海を渡れば、トラックで来ていたので取りに行ける。フェリーの到着先は大阪南港。

田舎者で都会の地理も分らないし高速は走ったこともなかったが、未明の午前二時半に起きて道に迷いながらも、ユズ果汁を受け取り、十時の開店には何とか間に合わせた。二日後にまた品切れとなり、再び深夜からの輸送販売となった。商品が売れる嬉しさで疲れを感じなかった。

いま振り返ってみると、かなり無理な行動だったが、これぐらいのことができなかったら、不可能が可能にはならなかったと思う。

全国の百貨店を回り 対面販売したが…

農家が作ったユズを売るために、その後、全国各地の百貨店に足を運び対面販売を行ったが、いつも売れるとは限らない。売れないと疲れるし、JAに帰っても評価が悪い。でも決して手を抜いたわけではない。

そんな中から、催事で買ってくれたお客さんに産地直送で販売する方法を思い付いた。リストは三千人を超え、ここまででかかった年数は八年を超えていた。

この間、催事ばかり参加していた

わけではない。先輩が定年退職をした後、課長になり営農指導と商品開発さらにマーケティングなどで、仕事は増えるばかり。

この頃の従業員数は、同僚の職員が一人、女性五、六人が日雇いで働いてくれた。社会保険を掛けてあげたいと思っても、まだ役員の理解はなかった。いつかは身分保障と賞与を出せるようにしてあげたかった。

林業立村に時代の波が

馬路村は藩政時代、土佐藩のお留め山として、村の面積の約七五％の山林が管理されていた。明治以降、山は国に移管され、国有林野事業の中で伐採や搬出を行い、村は賑わった。しかし、戦後の木材需要により急激な伐採で資源が減少していく。

また、木材の輸入自由化や住宅構造の変化などの要因により、林業を取り巻く環境が悪化。地域から急激に人がいなくなり始める。村の面積の九六％が森林である林業立村から働く場が失われつつあった。

この頃、私は少しでも農業で所得を上げようと、市場出荷を目指したユズの品質向上などに取り組んでいた。意欲ある栽培農家もいたが、高齢化や兼業による栽培のため、多くは加工原料にしかならなかった。

農協の役目として、たとえ加工原料であっても、将来に希望を持って栽培するためには、売る仕組みを作らないといけない。広告宣伝や経費のない中で、できるだけ費用をかけず、持続する売り方の構築が大きな課題であった。

「村を売り込む」 ユズの森構想

ユズ果汁の販売のみでは、年間を通して安定した事業にはならない。付加価値がないため利益も出ない。利益がないと生産者に還元できない。また、働く人にも他の企業並みに賃金を出してあげたい。

考えれば考えるほど、加工するこ



ゆずの森計画



加工場荷造り



ユズの森の秋の風景

との重要性が増していたが、農協には加工への取り組みの理解者はあまりいなかった。「厚い壁」が道を塞いでいるようだったが、この壁を越えるためには小さな成功を積み上げ、結果を数字で示すしかなかった。やがて売り上げは一億円を超え、二億円となった。小さな設備投資が少しずつ認められたが、まだ本物ではなかった。

その頃、新しいデザイナーに出会った。彼らもまた田舎に憧れを感じ始めていた。二度目の理事会でデザイン事務所との取引が認められた。

その頃には村を堂々と出し、「馬路村のユズ」で売ることが地域ブランドになるのではないかと考えるようになった。デザイン

ナーたちも目指す方向が同じだった。村を売り込むことがそれ以降、二十年をかけて取り組む事業の根本となる。

平成五年に建設した加工工場の効果もあって、売り上げは年々増え、小さな山村に六十五人の雇用を生んでいた。また、年間に三百団体ほどの視察が訪れるようになり、村の観光協会が運営する宿泊施設も賑わい始めていた。ユズの販売に取り組み始めた頃を考えれば、想定以上の変化が村の中に起きていた。

だが、人はまた上を見てしまう。もう少し頑張ればユズ産地として、観光も含んだ六次産業が実現するのでは…と考えるようになった。村の入り口には、かつて賑わった営林署跡地があり、ユズの森構想として大

きな夢を持ち始めていた。

熱い思いで語っていくうちに、農協組織や行政、地権者の理解の中、搾汁工場・ユズの森加工場・パン工房・直売所・本所事務所・職員宿舍、そして二十二年度に化粧品工場が完成し、構想から九年をかけてできた。

時間がゆっくり流れる村

ユズ加工品の販売を始め、全国で三十五万人のお客さんと知り合い教わるのが沢山あった。それは村は村のままが良い。多少不便でも行っ て見たくなる村。ワクワクするような元氣が出る村。時間がゆっくり流れる村…などが、村をつくることでの確認事項となった。

馬路村でユズを作り売ってきたが、お客さまがいたからできたことである。これからも村を訪れたり、応援してくれる人がいると思うと、期待にこたえていかないといけない。

地域づくりという活動は一瞬でも氣が抜けないし、住民や従業員そしてお客さまの満足があつて続くことである。全国で取り組んでいる皆さん、あきらめず夢を持って、個性のある地域をつくり、地域を元気にしてください！

三重県多気町及び県立相可高等学校

三重県多気町

高校生レストランでまちおこし
―住民・高校・町役場が地域で連携―

多気町役場農林商工課長

● 岸川政之

三重県多気町は、松阪牛で有名な松阪市の隣町で、人口一万六千人足らずの小さな町である。多気町は古くから農業が盛んで、「多気」という名前にも「食べ物のたくさん取れるところ」という意味があると聞いている。

町内には、「五桂池ふるさと村」という動物園、コテージ、農産物の直売施設などを有する自然休養村がある。一九八四年に多気町が地域住民のために建設したもので、運営は自治会による自主経営手法をとっている。

その中心が、農産物直売所「おばあちゃんの店」である。地元農家三百二十軒が野菜を並べるだけでなく、手作りの加工品、生花や種なども販売している。

その中に、今回ご紹介する、県立

相可高校食物調理科調理クラブが運営するレストランがある。孫のような高校生が運営することから、その名も「まごの店」。行列のできる人気店となっている。

一流ホテルにも負けない
高校生による料理の数々

二〇〇二年、多気町役場農林商工課に在籍していた私は、農業振興の一環で、認定農業者の生産する農産物をPRする「試食会」を開催しようと、同校食物調理科にその試食会の料理作成を依頼した。

高校生が作った三十品もの料理は一流ホテルに負けないものだった。その実力に驚き、感動した私は素晴らしい生徒やその指導者である村林先生に惚れてしまい、一週間に四日ほど放課後、学校に通うようになった。

そして「生徒たちの活躍するステージを用意したい」と、多気町の農産物を使い、高校生がその調理の腕前を披露できる「レストラン」を仕掛けていった。

この高校生シェフのレストラン構想は、前例がない上に、火傷や食中毒等、運営面や衛生面で問題が山積していた。高校生の参加については、学校のクラブ活動の位置づけとして土日・祝祭日など学校の休みの日だけの参加とし、村林先生が顧問の立場で指導するという自主参加方式とした。

建物は、調理実習施設として多気町が用意し、レストランの運営者は、「ふるさと村」が主体となるという手法で合意することができた。

最初の店は〇二年十月に、うどんや田楽を販売する屋台のようなお店として小さく開店した。生徒たちの元気で、真剣

な姿や美味しいうどんが評判を呼び、ふ

るさと村への入場者数の増加とともに「おばあちゃん



「まごの店」の外観



「せんばいの店」

するなど実質的な経済効果も見えてきた。

「おばあちゃんの店」から
「まごの店」「せんばいの店」へ

その後、県内の建築を学ぶ高校生の設計による現在の新「まごの店」も完成し、一日限定二百五十食のランチを食べに全国から観光客が殺到するなど、高校生を中心に据えたまちづくりを展開している。

〇八年九月からは、食物調理科の卒業生が、スーパーの中やふるさと村に惣菜とお弁当の店(株 相可フー ドネット「せんばいの店」)を開業し、年間八千万円を売り上げ、二十七人の雇用を生んでいる。

こうして、地域ぐるみで、若者の定住と雇用先を創出している。百聞は一見にしかず、是非一度、多気町にお越し下さい。

株式会社四万十ドラマ

四万十川から多彩なビジネスを発信

―環境を守り地域資源を発掘、商品開発―



代表取締役 ● 畦地履正

四万十ドラマは、四万十川の地域資源を発掘し、見直ししながら、新しい価値観を生み出すことが大事だと考えている。地域に住む人達が丹精込めて作った産物に「光」をあて、考え方の視点を加えることにより、地域の生き方や風景が見えてくる。

四万十川に負担かけないものづくり

これまでの商品に少し手を加えることにより、雇用が生まれ、流通や情報発信を開発することで、その光りがさらに輝き、四万十川ブランドとして全国に認知される。

その商品購入者が、四万十川を訪れば、地元と「顔が見えるおつきあい」が始まる。それを繰り返すことで、新しい「旅」と「産業」が生まれ、人材が育ち、ブランドの向上にもつながると考えている。

私たちは四万十川の自然環境を保全しながら活用することをベースに、環境・産業・ネットワークを循環させて、川に負担をかけないものづくりをしている。具体的なコンセプトはローカルローテックローインパクトだ。

ローカルとは、四万十川を共有財産に足元の豊かさ・生き方を考えるネットワークを構築すること。ローテックとは、農林漁業に生きづく技術や知恵や第一次、一・五次産業にこだわること。ローインパクトとは、四万十川に負荷をかけない風景を保全しながら活用する仕組みをつくること、である。

この考え方の軸に「ローフード」「ローライフ」の提唱を加える。私たちの商品開発は、三つの言葉をキーワードに、地元にあるもの、に、できるだけ手をかけず、地域資源を

発掘し、見直しをしてきた。例えば「しまんと緑茶」。

四万十のアイデンティティ商品の数々

十五年前までは四万十のお茶は静岡茶に混ぜられていた。しかし、自分たちのお茶を自分たちで売りたい！との思いから、混ぜられる茶から混ぜる茶へ、ということによって「四万十のお茶」が誕生した。平成十四年に四万十川流域茶葉しか使わない「しまんと緑茶」を商品化し、その後、シリーズ商品を発売している。

「十和錦・かおり米」は、約五十年前に旧十和村で発見された十和錦という「香り米」である。そのまま食べると香りがきついので「いつものお米に混ぜるだけ」をキャッチフ

レーズに、八十㍉の小さな米袋に入られて販売。お米に混せて炊くと新米のような香りになる。

製材所から出る四万十川ヒノキの柱の端材をリサイクルした商品が「四万十のひのき風呂」。捨てていたヒノキの端材に、ヒノキの油を染み込ませて、焼き印を入れた。ポリのお風呂の回りに置くだけで、ひのき風呂に入ったような感覚になる。

「四万十川新聞バック」は、古新聞をレジバックとして再利用する運動を川流域からスタートさせようと、新聞紙古紙一〇〇%のバックをつくったものだ。地元の主婦のアイディアがきっかけだが、この袋は全国へ広がり、今や海外へも輸出され、エコバックとしてメディアにも取り上げられている。

平成十九年七月、「道の駅四万十とおわ」が四万十川中流域にオープン。何もなかった田んぼの土地が、五十万人の集客と五億円の売り上げを生む場所に生まれ変わった。

四万十川は環境が命である。商品が売れても、原料を生む環境が荒廃しては意味がない。生産現場を復興しながら風景を守り、育み、流通させる。その商品に四万十川の「考え方」を反映させるようなビジネスを生むことが、私たちの使命と考えている。



四万十川方式「地元発着型」産業

株式会社エフエムもえる

地域の絆を再構築するFM局

―住民が運営、まちが聴こえる「回覧板」―



エフエムもえる社長

● 佐藤太紀

「何もない」が合言葉のような留萌市で、コミュニティFMの動きが具体化したのは平成十六年五月のことである。そのころ、行政が主催する市民会議などでは元々、他力本願な傾向の強い住民による恣意的で言いつ放しの発言が多かった。

行政はそれにこたえられる訳もなく、住民へ提供される情報も最小限で、相互の猜疑心が地域活性とは逆の方向に作用していた。そんな中、月尾嘉男東京大学名誉教授の私塾「萌州沿岸塾」（留萌市）の塾生が中心となり、地域住民による地域情報受発信を通じて、まちを活性化するための放送局を立ち上げた。

番組構成から機材操作まで
ボランティアが運営

住民が作り運営する地域ラジオ局は留萌市周辺では全く新しい概念で

あったため、初めは周囲の理解・協力は困難を極めたが、地縁の強みを活かし、ともに活動する住民を徐々に増やしていった。小学生から八十歳を超える幅広い住民（放送エリア外からも含め約百二十人）がボランティアパーソナリティ・番組構成・放送機材操作など、放送に必要な一連の作業すべてを務め、年中無休の二十四時間放送を続けている。

内容は地元情報で構成され、地域の行事・イベントから日々の些細な出来事、地域に特化した天気・道路情報、農業情報、ペットの飼い主探しまで情報を発信。留萌警察署から依頼された捜索放送の結果、行方不明者が発見されたこともある。

聴取者からの情報提供も盛んであり、留萌のような小さな地域での、誰もが参加できるFMもえるの仕組み

みでは、リスナーとパーソナリティの境界は曖昧である。結果として、インタラクティブなメディア（「まちが聴こえる回覧板」になっている。放送の中核を成すボランティアパーソナリティは、登録数千人を超えるFMもえるメンバーズクラブ（FMC）に年会費千円を払って入会する。このFMCが放送局の運営母体となり、そこから選ばれた運営委員が局全体の番組構成やパーソナリティらの窓口を担う。

一方、株式会社エフエムもえるは放送免許とそれに伴う責務、情報の一元管理、日常的なボランティアサポート、レギュラー情報帯番組（日延べ四時間）、放送局を維持するための営業を行う経営母体だ。

両母体を両輪として機能させるため、人々の善意を前提とした仕組みを構築し、「できることを、できる人が、できる時に」という自由意志

を基調としつつ、同時に発言と行動に伴う責任も各人が持つよう運営されている。また、情報という魅力へ人が集まることで、その人々そのものが魅力の構成要素となり、それが

また人呼び込む。

そのように多くの住民、組織、団体、行政、企業などを地域情報発信というキーワードで巻き込んだ結果、自らまちのために動く市民と、それを実現するために考える組織や行政の関係が広がっている。

地域にとって大切な
プラットフォーム目指す

賛成者を増やすのではなく、反対者を減らすことを主旨として、コミュニティの中核になった小さな放送局は、誰でも入ることができ、誰でも番組を持つことができる。

現在は市民メディアとして地域フリーペーパー、地域ポータルサイトへメディアの幅を広げ、地元産物の商品開発や流通などを手がけている。今後は、住民自らがまちのことを主体的に考え、行動する「コミュニティシンクドゥ・タンク」のプラットフォームを目指している。



イベント会場の臨時サテライト



子どもらも参加した放送風景

洞爺国際交流協会

「小さな国際都市」を目ざす町
—歴史を乗り越えた絆による地域づくり—

会長 ● 五十嵐優子

たそうである。

洞爺湖町は北海道南部に位置し、平成十八年三月に虻田町と洞爺村が合併し、「洞爺湖町」が誕生した。東には伊達市、壮瞥町、西は豊浦町に接し、湖（洞爺湖）と山（有珠山）と海（噴火湾）に囲まれた自然豊かな町である。洞爺湖町を中心とする地域は、北海道においても、もっとも気候温暖で有数の観光地である。

駐英国日本大使の想いから
始まった…

一九八八年ロンドンで竹下首相とサッチャー首相の首脳会談が行われ、日英の文化交流を促進するとの合意がなされた。故・千葉一夫大使から、現日本ボランティア学習協会代表理事の興相寛氏に電話が入り、英国の若者たちのために、日本でボランティア活動するチャンスを開拓してもらえないか—というものだった。

英国には高校卒業直後の就学猶予期間「ギャップイヤー制度」がある。それを活用して、海外でボランティア活動を希望する若者たちに活動の機会を提供する、チャリティ組織「プロジェクト・トラスト」の代表との出会いもあり、興相氏によりそのチャンスは旧洞爺村にもたらされた。

一九九一年に最初の英国ボランティア青年二名の受け皿として「洞爺国際交流協会」が設立された。以後二十代の英国青年を受け入れ、多くの人々のつながり、ご協力のお蔭で、この度、設立二十周年を迎えることができた。



歴代ボランティア20周年記念



保育所で雪あそび



英会話教室の様子

毎年九月から翌年七、八月までの

約一年間、青年たちは公営住宅に居を構え、共同生活をしながらボランティア活動に励む。私たちは主にプライベートな時間に食事に招いたり、ドライブや買い物に連れ出したり、日本の文化を紹介する。また週に一回、住民を対象にした英会話教室を開催し、青年たちに英会話指導をお願いしている。

青年たちの洞爺湖町での主な活動先は、保育所、小学校、中学校、高校、病院（現在は社会福祉施設）などである。

国際感覚豊かな子供たちの
未来に向けて

今春から小学校での英語教育がスタートします。私達は学校支援ボランティアとして団体登録し、子供達のためにお手伝いができればと願っている。

日本独特のイベントである村まつり、ひなまつり、成人式、文化／茶道、華道、書道、柔道、剣道などのほか、スキー、スノーボード、カヌーや毎年桜の時期開催される洞爺湖マラソン大会への参加などを体験してもらい、異言語、異文化交流をはかっている。

地味だけど、手作りで暖かい一歩一歩づつ世界へ想いをさせていく草の根交流である。苦い戦争体験を乗り越えて一人ひとりがお互いの平和を祈る。

特に洞爺の子供達は外国人アレルギーがなく、貴重な体験は財産となり、国際感覚豊かな人材となり世界に羽ばたいていくことと思う。

思いがけない受賞の「プレゼント」をいただき、深く感謝しながら、さらなる活動に励んでいきたいと思っている。ありがとうございました。

NPO法人清水町アイスホッケー協会

全国から集まるスポーツ留学生 ―住民主体で運営、各種大会や合宿も誘致―



代表理事

● 水津栄次郎

北海道清水町は、日高山脈と十勝川によって形成された美しい自然景観に恵まれた、酪農・畑作・農産加工業の盛んな人口一万人の町である。私が住む御影地区は、昭和七年から始まった十勝アイスホッケー発祥の地であり、清水町アイスホッケー協会は、その伝統を今日まで受け継ぎ発展させてきた。

ここでは、幼児から社会人まで二十一のチームがあり、約六百人がゲームを楽しむコミュニティスポーツとして定着している。町は、平成四年に町村では全道の室内リンクを建設し、各種大会の開催や合宿誘致などアイスホッケーで元気なまちづくりを進めている。

1年の始まりも アイスホッケーで

昭和三十五年から始まった「新年

氷上まつり」は、現在も毎年元日に町民誰もが気軽に参加できる恒例行事となっている。平成九年には、町内全チームの選手・関係者・家族が一堂に会し、大晦日から元日にかけて「町民親睦二十四時間アイスホッケー大会」を実行して結束を深めることに成功した。

国体、インターハイなど 全国大会の共同開催地に

北海道十勝で開催された国民体育大会冬季大会、インターハイ、インカレなどのアイスホッケー全国大会では、清水町は帯広市と協力して共同開催地となっている。今後も全道全国大会などの開催による交流人口の拡大と地域経済活性化が期待されている。

平成十三年頃より、国や地方の財政状況の悪化に伴い町営アイスア

リーナも行革対象施設となり、存続の危機に見舞われた。このため、私たちは館内の清掃を会員がボランティアで行うことにより、管理経費の削減に努めた。

そして「これからは愛好者による住民組織の強化が絶対に必要」と考え、平成十六年度に北海道の認証を得て清水町アイスホッケー協会を特定非営利活動法人とした。

平成十九年度から、指定管理者としてアリーナの維持管理運営業務を受託して効率的な管理運営を行うとともに、職員に日本リーグ経験者を三人雇用し、十勝ジュニアクラブの設立など新たな事業についても積極的に取り組んでいる。また指導者付きの合宿地として、道内外のチームから好評を得ている。

恵まれた環境に各地から アイスホッケー留学生

このように全国的にも優れたアイスホッケー環境にあることから、

北海道立清水高等学校は毎年全道優勝、全国



高校一を占うサマー大会



元日恒例の新年氷上まつり



幼年大会では珍プレー続出

優勝を目指す「強豪校」と評価され、アイスホッケー部に道内はもとより、全国各地から選手が集まってきた。少子化の中で、地元高校の一学年四間口が現在も確保されるとともに、下宿生の衣食住などによる地域経済への効果は大きな成果の一つである。

また、遠くは九州からも御影中学校へのアイスホッケー留学希望者があり、地域住民の協力により平成十年頃からこれまでに、二十人以上の中学生を受け入れている。

清水高等学校や全日本女子Aプールに所属する「フルタイムシステム御影グレッズ」の活躍を多くの町民が応援している。

近年この両チームから複数の選手が十八歳以下の全日本代表選手に選ばれて海外での試合を経験するなど、地域の子どもたちが世界に向かつて羽ばたいている。

NPO法人尾上蔵保存利活用促進会

教育旅行受入れで農業再生に活路 ―農村文化とグリーンツーリズムを融合―



常務理事

● 佐藤正彦

平川市は、青森県南津軽郡の中心に位置する尾上町・平賀町と、秋田県境の碓ヶ関村が、平成十八年一月に合併した、人口三万四千八百人のまちである。東に八甲田山、西に岩木山があり四方山々に囲まれ、緑豊かで四季の移り変わりが美しい。

また、浅瀬石川と平川の清流が農業に適した肥沃な地質を育み、リンゴや米・野菜・花などが基幹作物の農業地域と、県内一の農家蔵や庭園・国の登録有形文化財数、そして豊富な温泉もある。

昭和四十年代の旧尾上町は、リンゴ産業で潤い、リンゴ移出業十四間屋・割烹三軒・酒造会社二社など商店街も活況を呈していた。当時のリンゴ生産量は約五十万箱もあり、その中心生産地が私どもの活動拠点となっている金屋地区であった。

農業の衰退に伴い、活況だったリンゴ移出業十一間屋、割烹・酒造会社は廃業した。リンゴ生産量は今では約二十万箱に減少し、輸入農産物の増加や産地間競争で、農産物全般が価格低迷し、再生産価格すら維持できない状況だ。

農家には借金の増大や後継者不足、嫁不足、農業生産意欲の減退、耕作放棄農地の増加―など、地域農業崩壊要因が山積している。

津軽地域で初の体験型 教育旅行を受け入れ

そこで、地域農業の現状を踏まえ、グリーン・ツーリズム（GT）事業の拡充が、農村活性化につながる可能性が高いと判断。「地域農業を崩壊させてはならない」との危機感から、他市町村にはない農家蔵や農家庭園などの資源を活用したGT事業

の普及拡充で農村に活気を取り戻そうと考えた。受け入れ農家の組織化を図り、消費者対象の「蔵・農家庭園ウォッチングと収穫体験（ブドウ・イチゴ・リンゴ・花・花木）」「遊休農地活用枝豆・サツマイモ栽培・収穫体験」を食農教育と位置づけ、取り組んできた。

十六年春からは、津軽地域で初めて「修学旅行農作業・農村生活体験ファームステイ」を受け入れた。体験メニューや、受け入れ農家民宿営業許可登録、GTインストラクターらの養成など受け入れの要件を整備し、津軽GTが本格始動した。地域農業維持発展の志を持つ仲間とゼロからスタートし、ようやく漸く「県内一」の実績を確保した。

教育旅行の受け入れで、生徒と受け入れ農家が感動を共有し、交流に発展していることが、農家らの農業に対する価値観の変化とともに、従来の農業形態から、GT事業を主とする「生産・教育・

交流・販売」という交流型農業形態構築の必要性の理解につながり、地域農業再生に手応えを感じている。



農作業体験に汗流す男子生徒



蔵・農家庭園巡り

GTで地域農業維持と 生徒らの食育教育実現

農業分野でのGT、とりわけ修学旅行生らの農作業・農村生活体験は、農業と食料の大切さを理解させる食農教育とともに、受け入れ農家と寝食を共にすることで、人情や思いやり、家族愛を体感するなど、生徒らの心の教育にもつながる。

GT事業を生業として取り組む地域もあるが、私どもにとってGT事業は受け入れ農家の経営力向上と地域農業再生運動と位置づけている。農作業体験は未成熟なコンセプトとの意見もあるが、農業維持発展あつてのGT事業である。

「食は文化・食は命」であり、「土に立つものは倒れず、土に生きる者は飢えず、土を護るものは滅びず」とはある識者の言葉。その源は農業・農村である。GT事業の拡充で、受け入れ農家の啓蒙と教育旅行誘致活動をさらに展開していく。

千厩夜市実行委員会

楽しめる夜市がまちに賑い

―商店街と市民が連携、交流人口も増加―



会長 ● 千田恭平

私も千厩夜市実行委員会のある一関市千厩町は、岩手県南にある。東北新幹線の一ノ関駅で下車し、そこから車で国道を太平洋に向かって三十分ほどのところにある人口一万二千人ほどの、なだらかな山に囲まれた地域である。

「昼売れなければ夜売ろう」

この夜市開催のきっかけは、約三十年前にさかのぼる。冷害の影響で消費が落ち込んだ一九八〇年のこと。JR千厩駅からおよそ二キロ続くウナギの寝床のように長く伸びた商店街の端の方にある愛宕商店会の中から次のような声が上がった。

「昼売れなければ夜売ろう」。

二年後、隣接する新町、本町、四日町の三つの商店会・振興会も参加し、夜市の実行委員会がスタートし

た。お金がないので、ポスターやら広告宣伝などはすべて会員の手作りであった。

開催から三年経過したころにマンネリ化が課題となり、一九八五年に「物から心へ 売ることよりも楽しい市へ」と方向転換し、現在に至っている。その夜市も、今年で三十年目を迎える。

この間、様々な事業に取り組んできた。公募によるテーマソングの「千厩夜市音頭」を作り、夜市の前日から商店街にスピーカーで音楽を流し、ムードを盛り上げる。

恒例となった盆行事の「燈立て」や本格江戸神輿競演会と千厩を象徴する「うまっこみこし」は、今や夜市の名物。夜市キャラクター「せん太くん、まやちゃん」の馬のぬいぐるみは現在も活躍中だ。

二十九年続いた夜市は、雨の日も風の日も開催し、通算二百二十一回を数える。従前は五月からスタートし、六、八月は月二回、九月で終了と、暖かい時期を中心に開催していたが、一九九七年からは開催時期を四、十一月の間、月一回の通年型とした。

盛りだくさんのイベント 人で賑わう歩行者天国

現在は四月から十月まで、毎月第二土曜日（八月は十四日に固定）の年七回、夜七時から十時まで、国道が通る新町・本町両商店街のおよそ五百メートルを歩行者天国にして実施している。

各商店は夜市にちなんで四一〇円セールや、スタンプ五倍セール、焼き鳥やカキ氷などの出店、全品割引などと工夫をこらしている。金魚すくい、射的、風船、屋台など沢山の露天商の店も並ぶ。

おもちゃの病院、紙芝居、バザー、

フリーマーケットなどはすっかり定着した。投げ銭コンサートの隣のビア



あかしたて



うまっこみこし



夜市キャラクター

ガーデンでは久しぶりに出会った友人同士の話が盛り上がっている。多くのイベントや様々な団体の発表などで、普段は人通りの少ない商店街もこの時間は人であふれる。さらに今年は、夜市開催三十周年を迎えるため、記念事業として「夜市サミット」「夜市B1グランプリ」「サンバでGO」「高校生バンドバトル」などのイベントも予定している。

運営は商店街の会員からなる千厩夜市実行委員会で行っている。四つの部会（企画広報、外商交渉、装飾警備、会計）があり、会員はそのいずれかに所属している。

イベントや道路使用許可など運営に必要な経費は、会員からの会費のほか、市からの補助や露天商からの出店料などをもって充てている。

せんまや夜市に来れば、きっと楽しいことに会える。どうぞ、気軽に遊びに来てください！

協同組合 仙台卸商センター

文化・芸術を柱に地域を活性化 ―商業界の領域を超えた協働・連携―



理事長

● 氏家裕一

「人に愛され、人が集まり、
人が住めるまち」を目指す

当組合は昨年、創立四十五周年を迎えた。昭和四十年の設立以来、「組合員のための組合」を基本理念として、各種共同経済事業を実施し、全国有数の卸商団地として発展、今日に至っている。組合員数は二百七十三社。

当組合では、「人に愛され、人が集まり、人が住めるまち」をテーマに、行政や大学等と産学官協働によるイノベーションで、文化・芸術機能をまちづくりの一つの柱として「新しいまちづくり」の推進に取り組んでいる。

まちづくりの目的は、この街で組合員が商売を多角的に展開できるように経済自由度を高める経営環境の整備を行うことで、組合ともども永

続的に発展できる地域にすることにある。

まちづくりの契機は、平成二十七年開業予定の仙台市地下鉄東西線の仮称・卸町駅が街の南端に設置されるということもあるが、平成十四年、仙台市が整備した演劇練習場・せんだい演劇工房10・BOXが団地内に立地し、協力関係を構築できたことが大きい。

また、組合定款の変更により、組合員資格業種の拡大を行い、卸売業以外の多種多様な企業が進出してきたこともまちづくりの推進に大きく寄与している。

さらに、以前は卸売業の立地しか認められていなかった卸商団地の土地の用途制限について、仙台市へ規制緩和を要望、平成十五年十二月に、一定規模の小売店や劇場等の立地を

許容する街とした。

次いで平成二十年六月には、街の中心部の大通り沿いの地区を対象に、一定条件の下に居住を許容する「地区計画」を実現し、地域の経済自由度が拡大することとなった。

既存資産を活用し 新たな「街の顔」をつくる

こうしたことを背景に、リノベーション（既存資産の有効活用）の手法を取り入れ、当組合では元組合員の倉庫を取得し、イベント倉庫としての活用を行う一方、卸町会館地下を改修して音楽練習場「MOX」や同会館五階の旧ビジネスホテル跡地にインキュベーション施設「TRUNK」を整備し、街の「新たな顔」をつくった。

同時に、卸町ふれあい夏祭り、卸町ふれあい市、野外映画上映会「おろシネマ」、卸町へえへえウォーキングツアー、みちのくフォークジャンボリー



みちのくフォークジャンボリー



卸町ふれあい夏祭り

ンボリー、卸町ドリムコンサート、イベント倉庫でのシェイクスピア劇の上演――等々、多くのアーティスト、ミュージシャン、市民グループ、学生、クリエイターなどとの交流が生まれ、相互理解の上に立った市民に開かれた新しいまちを形成している。

平成二十一年一月には全国で初めて、クリエイティブ産業の集積を促進するための「クリエイティブ産業立地促進制度」の対象地区として、仙台市より当組合地区が指定を受けた。

今後は、二棟あるイベント倉庫のうち一棟を改修し、能舞台型文化交流拠点施設を今年七月にオープンする予定で、能楽や神楽、演劇、セミナー、展示会といった文化・芸術活動の新たなコンテンツが加わることになる。

今後も卸売業を主体とした地域特性を活かしながら「文化・芸術」も柱に据えたまちづくりを積極的に推進し、組合員企業と組合、そして地域社会の持続性ある発展につなげていきたい。

JA秋田ふるさと青年部

農業っていいじゃない！
—食農教育、婚活支援にも取り組む—

青年部部長

こもりや
籠谷 亨

JA秋田ふるさととは、秋田県南部横手盆地の中央部に位置し、平成十年四月に九つの旧市町村JAが広域合併して、誕生した。東は奥羽山脈沿いにリンゴを中心とする果樹園が連なり、西の出羽丘陵地帯では畜産が行われている。中央部には肥沃な耕地が広がり、水稲地帯が形成されている。

今から五年前、JA秋田ふるさとでは食農教育に取り組み始めた。県内の若手を含む大半の農家の人は消費者に説明するのが苦手であるため、「これからは消費者へ自ら国産農産物の重要性、そしてなにより農家の心を伝えられるようにならなければならない」との考えからだった。

初めは十三組三十人ほどから始めた農業体験だったが、今では当JA管内を回る年二回の農業体験バスツ



●●●

農業体験を経て児童らが残さず食べるようになった

効果はあった。「子どもの好き嫌いが無くなった」「朝ご飯をしつかり食べるようになった」など、うれしいお手紙が多数寄せられた。



●●●

さらに、四年前からは、秋田県を飛び出し、神奈川県相模原市の小学校への出前授業を始めた。

そこでは、田んぼを間近で見たことがない、どうやってお米ができるか分からないという都会の児童たちに、土づくりから田植、稲刈りそして食べるまでの一連の作業を指導している。

以前は給食を山ほど残していた児童達が、「給食は残さず食べよう！」「お米の最後の一粒まで大切にしよう」と教室のあちらこちらで呼びかけ、残さず食べるようになった。

今では年間一千人を超える児童、生徒及びその保護者に食農教育を行っている。我々はこの五年間で、農業に対する思いを消費者に伝えるという力をつけることができた。何より「消費者との懸け橋になるのは

自分たち」という誇りが芽生えた。

3割強の独身男性に
出会い応援企画も実施

そんな中、若手部員の三割強が独身である、ということに気付いた。きっかけを作るため、出会い応援企画を準備したが、農業が抱えている高齢化等の問題や辛さ、汚れる仕事というイメージがついて回り、参加者も集めづらい状況だった。

そこでNHKの協力のもと、全国から農業に興味のある独身女性を集め、私たちの得意なフィールドである畑で、出会い応援企画「農業っていいじゃない！」を開催した。得意分野である食農教育を取り入れ、女性と一緒に種を巻き、八カ月かけて管理し、収穫そして食べるまで体験してもらった。

参加した女性たちからは「自分が植えたものが育つ喜びと農家の人の大きな気持ちに感動しました。農業って楽しい！」と見事、イメージアップにもつながった。テレビを見ていた視聴者からも、激励の手紙やメールが多数寄せられた。

まだカップル成立まではいいっていないが、お互いが気になる男女が数組できた。これからも農作業と同じく根気強くこの活動を続け、大輪の花々が咲くように努力したい。

庄内映画村株式会社

山形県鶴岡市

映画を通じた地域づくりで成果
— 撮影誘致・観光誘客など地域の魅力発信 —

代表取締役社長 ● 宇生雅明

「蟬しぐれ」映画化の苦勞

二〇〇一年十一月、私の事務所に脚本家の黒土三男氏が訪ねてこられた。「蟬しぐれ」を映画化する資金調達のホームページを作って欲しいとのことだった。

翌月、藤沢周平氏の故郷、山形県鶴岡市に取材旅行に向かった。ある方の紹介で、庄内藩酒井家十八代目酒井忠久氏にお会いし、別れ際、黒

土氏を書き上げた「蟬しぐれ」の脚本を差し上げた。

四カ月後、電通から一報が入った。私が渡した脚本が目にとまり、「打ち合わせをしたい」との内容だった。それは酒井氏から人を介して、電通の専務の元へ届いていた。

翌〇二年の夏、監督は黒土氏に決まり、「蟬しぐれ」は映画化に向けて動き始めた。後はプロの方たちに任せて、私は本業に戻った。



映画村資料館



漁村エリア

しかし、制作サイドから連絡が入った。黒土氏が望む撮影規模でやると、現場費が大幅に増えてしまう。そこで、私に現場の仕切り役を頼みたい——との話だった。映画撮影などやったことがない。

正直、悩んだが「蟬しぐれ」を映画化したい。その気持ちだけで引き受けることにした。

黒土氏が望む撮影のためには、百二十人近いスタッフやキャストの宿泊、レンタカーの調達等々、どれをとっても膨大な費用がかかる。これをカットする。庄内で知り合った方達にお願いして回った。

温泉旅館は五部屋を常時無料提供、市内のホテルはシーツの洗濯代ほどの金額で部屋を貸し出し、車のディーラーは無償で車を出してくれた。地域の方々の全面協力が実現した。撮影が終了した時には、見事に予算に収まっていた。

撮影地の売り込みに奔走

鶴岡市に「松ヶ岡開墾場」という史跡がある。明治時代の大蚕室が五棟現存し、その農地に「蟬しぐれ」のオープンセットを作り、撮影が行われた。撮影終了後、今度は配給会社から映画公開まで地元で狼煙（のろし）を上げてくれ、と言われた。

セットを一般公開し、大蚕室を借りて「蟬しぐれ」資料館を作り、さまざまなイベントを行った。多くの方が松ヶ岡に足を運ぶようになった。このまま多くの人に来て欲しい。それが私の願いだった。

セットを維持するには、どうしたらいいのか。その時、二本の映画撮影の噂を聞き、急きよ東京へ飛んだ。久しぶりにお会いした制作会社の社長に「松ヶ岡で映画の撮影をして欲しい」とお願いした。

しかし、「撮影地は他に決まっております、庄内で撮影するには予算が足りない」と説明された。「うーん」と私がうなづいていると、庄内で足りない資金を集めると約束するなら行きます、と言ってくれた。

「集めます」と即答し、庄内に戻った。酒井氏をはじめ「蟬しぐれ」で協力してくれた方々に集まってもらった。「なんとかなる」「法人格を立ち上げて銀行とも付き合おう」と、前向きな話ばかりが出てきた。

そして、株主は一律一口五十万円、上も下もなく、全員筆頭株主方式とすることに決まり、二〇〇八年七月、「庄内映画村株式会社」が発足した。現在、百二人の株主で運営されている。

気がつく「ジャンゴ」から始まり「おくりびと」そして「十三人の刺客」と九本の作品を撮影していた。敷地面積二十六万坪を持つ広大なオープンセットも完成した。庄内入り、人と人との付き合いの本当の素晴らしさを実感している。

NPO法人アンブ

「百円商店街」で究極の販促事業
―商店街全体を一つの「百円シヨップ」に―NPO法人アンブ理事長
新庄市総務課主任

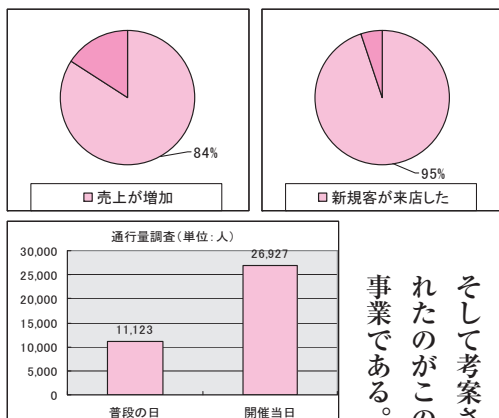
● 齋藤 一成

コストはチラシ代のみ

百円商店街という事業を考案したのは、今から七年前である。

全国的に衰退激しい商店街の様子は、当市においても例外ではなかった。商店街にあるお店の特徴やメリット・デメリットを消費者の視点

から分析し、そして考案されたのがこの事業である。



※大阪商工会議所調べ(実施箇所:大阪千林商店街(参加店舗数二百二))



お客さまが抵抗なく店内に



店主らの意識改革でにぎわいを盛り返す

「買わないと入りにくい」「入ったら買わないと出てきにくい」――。そんな消費者の概念を取り除くため、「店の外に百円の商品を」「会計は店内のレジで」という、このシステムで、お客さまが抵抗なく店内に足を踏み入れられるようにした。これにより、「知らないお店に初めて入った」というお客さまや、「ついでに通常の商品も購入する」お客さ

まが爆発的に増える結果となった。一見、単純に見えるこのシステムの裏には、複雑に計算されたロジックが幾つも隠されている。それらを知らない方々からは「百円商店街の魔法」などと呼ばれるている。この事業、単純明快さとスケールメリットによって、より効果が上がっている。また必要な経費もこれまでのさまざまなイベントに比べて、「チラシ代のみ」という格安なこと特徴の一つであろう。これからの時代、商店街活性化事業は、もはやハード整備や補助金頼みのような時代ではなく、商店主ら自身の意識改革しか道は残されていないのではないか。

58自治体で導入、さらに増加中！

独立行政法人・中小企業基盤整備機構のアドバイザー派遣制度の後押しもあり、昨

年末までにこの事業は、全国五十八市町村で導入されるに至っている。現在でも、起動準備を行っているところが十二カ

所ほどあり、全国百市町村を超えるものもはや時間の問題とみられる。なぜここまで広がり続けるのかには、実は理由がある。何よりもやっている側(商店主)が楽しいのである。来客者に喜んで楽しんでいただき、商店主も楽しい。

その両者のバランスによって、地域全体が楽しくなる。「買い手よし、売り手よし、世間よし」という三方よし、ここでは実現されている。

そして、その楽しさに加え、「収益の増加」「新規顧客の確保」「地域コミュニティの再生」といったところが、この事業の大きな特徴である。

「平成のロボットの卵」

この成果は、これまであった既存の商店街活性化事業と比べるべくもなく、作家の村上龍氏からは「平成のロボットの卵」とさえ言われた事業である。

真の商店街の活性化とは、そこにある個店個店の収益の増加だと私は考える。そのためには、補助金をはじめとする他者の力を借りず、自分たちの知恵やアイデアだけで勝負できるのが「百円商店街」である。

お声掛けいただければ、すぐにもおうかがいしますので、お気軽にご連絡をいただきたい。

ながい黒獅子まつり実行委員会

伝統芸能の復活で地域を再生 ―祭りの存続でコミュニティの絆強める―



実行委員会 委員 ● 金田 眞一

山形県長井市は、豊かな自然に囲まれ、吾妻山系を源流とする最上川、飯豊山系を源流とする置賜白川、朝日山系を源流とする置賜野川の清らかな水が長井の里に注がれる。古くは米沢藩の舟運の川港として栄え、春の桜に始まり、白つつじ、あやめと季節折々の花々に彩られる。

千年の伝統神事として 受け継がれる黒獅子舞

古来、人々は太平安泰を求め、神を心の拠りどころとして社を建立し、五穀豊穡・無病息災を祈願してきた。長井の獅子舞の起源は今から千年前にさかのぼる。現在でも、市内各地区では春から秋にかけ黒獅子舞が伝統神事として受け継がれている。

目玉が丸く飛び出し、「蛇頭」と呼ばれる獅子頭に波頭を表した大幕

の中に多人数の舞手が入る「むかで獅子」という、当地域特有のものであり、勇壮かつ威厳に満ちた動きをし、地域の人は昔から親しみをこめ「おしっさま」と呼び信仰を深めている。

今もなお各地区で継承されているが、少子高齢化、個々の価値観の多様化やライフスタイルの変化により、継承者も減少し、例祭の存続も危ぶまれる地区も聞かれるようになった。

少子化・高齢化の中で 伝統文化存続への取り組み

先人たちが守り継承してきた黒獅子舞の伝統文化を、より多くの人々に紹介し、また、地域の活性化につながるため、神社関係者の理解を得て、地域住民の賛同者を募り、実行委員会を組織し、各地区の獅子舞が

一堂に会する「黒獅子まつり」を平成二年から実施するに至った。

まつりの実施にあたっては、単なる集客イベントとしての見方もあり、さまざまな制約もある。獅子舞の舞手は、それでも神事を重んじ各々伝承してきた最高の舞を披露する。このことが従来より黒獅子舞の価値を高め、新たな魅力が創出された。

まつりに参加することが一つのステータスとなり、若者の参加が増えてきた。黒獅子舞の本質・伝統が心に響いたのではないだろうか。

また、観光で訪れるお客さまの中には、その奥の深さに感銘し、再度訪れ、各地区で行われている例大祭に足を運ばれる方もいる。舞手と観客が互いに満足し、充実感を共有できることが大切だ。

市内小学校では「長井の心」を育む文教のまちを目指しており、歴史・文化・風俗・習慣とのかかわりを大切にする教育の一環として、伝統文化を受け継ぐカリキュラムを組んでいる学校もある。児童たち

の伝統文化発表会の場として平成十九年より、黒獅子まつりの中で披露している。

子どもたちも稽古に励む

地区の高齢のお師匠様と呼ばれる人たちが、熱心に指導する。子どもたちも一生懸命に稽古に励むことにより、人と人とのつながりが強固となり、地域の和が広がる。ある意味では地区単位の小さな伝統が、市民の熱い情熱と多くの参画により、県内外からもお客さまを呼び込むまつりに成長し、地域の活性化につながっている。

「おしっさま」はいつまでも地域住民の心の拠りどころであり、笛と太鼓の音色が街中に響き渡ると心躍るものがある。若者たちが誇れる「元氣な地域」づくりを、継続し実践していきたい。



市内小学校伝統文化発表会



黒獅子まつりクライマックス

NPO法人川越蔵の会

歴史的景観活かし、まちに賑い
—巨大都市の近郊で独特の存在感—

事務局 ● 荒牧澄多

二十数年前の二月のある日曜日。寒風吹きすさぶ中、町を歩く者は私たちのグループのわずか数名だけだった。その時、あふれるばかりの人びとが訪れる町になるうとは、誰が思っただろうか。

「こえと小江戸」と呼ばれる埼玉県川越市は、いまだこそ年間六百万人を超える観光客が訪れる、一大観光都市となったが、私たちは観光地化を目指したのではない。望んだのは、かつて、埼玉県第一の商都といわれたまちの賑わいの復活であった。

住民主体のまちづくり
「蔵の会」が推進

「川越蔵の会」は、昭和五十八年に発足した。市街地北部にある一番街商店街は、江戸時代から続く川越の中心であったが、当時は駅周辺の商店街に客を奪われ、衰退の一途を

たどっていた。

しかし、その町並みを形成する蔵造り商家の貴重性は、専門家によってよく知られていた。

そこで会の発足にあたり、この蔵造りの町並みを保存するためには、各個店の経済力が重要と考え、「北部商店街の活性化による町並み景観保存」を唱えた。

また持続可能なまちづくりは、住民自身が議論し、方策を検討することによってこそできると考え、「住民主体のまちづくり」を謳った。さらに、それらを支える財団の形成——の三点を目標に掲げた。

会員には、蔵造りの町並みに関心を寄せる市内外のさまざまな人々が集まった。商店主や住民、研究者や建築家などの専門家、そして公務員などである。この会員

同士による勉強会の成果が一番街商店街に持ち帰られ、歴史的景観を活用した商店街として花開いた。

これまで「古臭い」と思われてきた蔵造りの町並みが、現代店舗とは異なる新たな魅力をもって生まれ変わり、来訪者は次第に増えていった。

一番街商店街の成功が
周辺地域にも波及

一番街商店街の成功は、周辺地域へも影響を及ぼした。隣接する大正浪漫通り商店街でも、当会と協働で歴史的景観を生かした商店街づくりが始まったのである。

さらに、マンションに変わろうとしていた旧川越織物市場では、地域住民と協力し保存運動を展開、後に川越市が取得し文化財指定された。また、市が取得した醸造蔵群をモデルに、民官学連携による活用方策の検討と活用実験も行った。

伝統的建造物の保存だけではな

く、まちに息づいている職人にも着目し、彼らを紹介する「町なか職人展」を開催した。

その一環として行われた左官体験では、川越市の協力を得て、先の醸造蔵の壁を塗らせていただいた。

蔵の会の活動は、単独で行うというより地域に働きかけを行い、その住民と協働することによって実現に至ることが多い。

これまで、一番街商店街の復活から重要伝統的建造物群保存地区の選定へと発展し、さまざまな歴史的資産の保存・活用運動は、行政とも結びつき今日の川越につながってきた。

ここに至るには、住民や行政に対する提言や協働だけでなく、時には苦言も呈してきた。いま再び、会の目標とこれまで行ってきたものを確認し、現状に流されることなく、次代に継承できる誇りを持ったまちづくりを継続して行きたい。



来街者で賑わう蔵造りの町並み



会発足から続く恒例のお茶会



市所有の醸造蔵を使った左官体験

映画製作会社FireWorks

日本初の「市民参加型映画」事業 —映画撮影後の地域づくりに貢献—



FireWorks ● 武藤直樹

「映画による地域づくり」はいま、全国各地さまざまな形で見られるようになった。ロケ誘致による経済効果を図るフィルムコミッション、映画館再生や市民映画祭による文化振興活動など、「映画」は地域づくりの一つのツールとも言われている。

そうしたなかで、映画製作会社FireWorksが各地で展開している「市民参加型映画」が非常に独特な存在として、注目を集めている。

あらゆるプロセスに 地域住民が主体的に参加

企画・製作・配給、あらゆる「映画」のプロセスに数多くの地域住民が主体的に参加しながら一本の映画を創り上げる手法だ。行政、商工団体、NPO法人などの地域団体とFireWorksがパートナーシップを築きながら、映画製作事業を推進し

ていく。脚本作りの場合は地域課題について世代を越えて深く対話する場を創出し、そこから地域の未来へ届ける物語が生まれる。

また、何千人もの住民の笑顔を撮影する「応援メッセージ」や、市民キャストを選出する「公開オーディション」など、地域愛を育むユニークな関連イベントをFireWorksは企画している。プロジェクトの進捗とともに、市民スタッフの輪が地域全体に広がり、地域における新たな人の絆が形成されていく。

さまざまな「参加の場」をひらき、市民スタッフの誰もがプロジェクトの「立役者」に成り得る点が、ご当地映画やフィルムコミッションとの大きな違いである。完成した作品が海外の映画祭で受賞し、それが地域の誇りとなった事例もある。

「映画づくりで住民同士が仲良くなればいい」という単純なものではない。一人一人が本気で映画にコミットし、意識の変革が生まれていくことが大切。映画づくりも、まちづくりも、それがなければ始まらない」と、FireWorks代表を務める映画監督の林弘樹は語る。

実際に二〇〇三年の『らくだ銀座』以来、FireWorksとともに映画を製作した地域では、映画市民スタッフの多くが今なお、継続発展的にさまざまな地域づくり活動を展開している。映画が生んだ火種が、地域の未来を創造している、とも言える。

映画づくりは究極の ものづくり、人づくり

FireWorksの脚本家・栗山宗大は「映画づくりは、究極のものづくりであり、人づくり。映画が持つ可能性を、とことん探求していき

たい」とも語っている。従来にはない新たな発想で映画を創り、



「未来へ届け！私たちの物語！」



地域の思いをフィルムに込める

届けていく。それこそが林、栗山両氏が設立したFireWorksへの想いである。その一つの形が「市民参加型映画」の手法だった。

ふと、どこかのまちの片隅で「映画づくりでまちを元気にしたい！市民の心をつなぎたい！」という想いを抱く人間とFireWorksが出会う時、そこに「映画」が生まれる。地域という舞台で誰もが「主役」として参加して、あらゆる想いをムキ出しにして、未来への物語を創造していくのだ。

* *

●市民総参加の映画プロジェクト
最新作「ふるさとがえり」

<http://www.enakoko.com/>

お問い合わせ

<http://www.fireworks-film.com/>

葛西さざなみ会

昔を今に、さざなみの活動
—海苔づくりの伝統を子どもたちに伝承—

会長 ● 篠原昌芳

「さざなみ会」の活動の特色は、

リーダーの類い稀なる個性にある。

一言で言えば、戦後一世を風靡した下町の創業経営者そのもの。すべからく率先垂範、二十四時間「会」の活動について考え、常時最善を求めて試行錯誤を繰り返している。

会員も改めることに躊躇しない。それができるのも、その人柄と葛西人特有の素朴さゆえで、まさに愛すべき「葛西男児」である。

会が二十余年も継続できたのは、大企業の元管理職や子育てを終えた主婦など多くの会員が「社会参加する大人たち」として、緩やかな組織体を維持しているからだ。その上、
「地域を好きだ」という気風にも支えられてきたと思われる。

活動の特色を会長にうかがった。

(葛西さざなみ会員・菅原)

—受賞のご感想は？

篠原会長 二十年来の活動が認められたことは嬉しい。今回驚いたのは、暮れに多くの少年団体などから、子どものための「餅つき体験」協力要請が殺到したこと。このため、十二月は半分以上も出張っていた。日程が合わなくてお断りせざるを得ないこともあった(笑)。

海苔干しを子どもたちに体験してもらう

—「餅つき」も既に二十年を超えたが、そもそののきっかけは？

会長 初めの頃は、親父と二人だけで学校に行っていた。親父が杵取りをしてくれていた。そこに少しずつ人も寄ってきてくれたので、葛西伝承の「千本づき」もできるようになった。いつの間にか、

年間延べ七、八十人になっていた。

—海苔の育成体験も三年目を迎え、「会」でお手伝いする学校も八校になっています…。

会長 海苔といえば、浅草海苔が有名だが、実際は葛西で採れたものが多い。葛西・堀江・猫実などが育成に適していた。これは海苔の研究者に聞いた話だが、寛永年間(一六二四〜四四)に書かれたといわれる『諸国名産下総図』には、「葛西苔是ヲ浅草苔トモ云」とあるそうだ。

昔は、ヒビという枝や竹を海中に立てて海苔の胞子を付け育成していた。その後、海苔網が考えられ(ヤシ縄・シュロ縄の網)、今はナイロン製になっている。

育成そのものは、葛西沖で元漁師と一緒に、子どもたちに見学させ、海苔干しを学校で行っている。一枚ずつ昔のやり方で天日干しする。自分も昭和三十八年三月までは、

親父を手伝って海に出ていたから、子どもたちに「昔」を今に伝えたい。
葛西の民俗文化の継承を
定着させたい

—来年度からの活動は？

会長 江戸川区子ども未来館のゼミ生を受け入れて欲しい、という依頼がきている。平成二十三年通年にわたり、五月の田植え、秋の刈入れ、餅つき体験のほか、海苔づくりも体験してもらう。特に海苔づくりは、道具の海苔網づくりから、海苔育成、収穫、海苔干しにいたるまで、じっくりと実体験できるカリキュラムになっている。ゼミ生は、こども未来館を利用する、地域の伝承文化に興味や関心を持つ子どもたち二十人くらいと聞いている。

葛西の民俗文化の継承は、郷土をみんなの手で造りだす一つの手立てとして、定着させたい。



海苔すき—1枚ずつ丁寧に



冬の陽射しを浴びて海苔干し



葛西地区の伝承「千本づき」

NPO法人子育てコンビニ

子育てに悩む女性たちを支援
―ボランティア活動や社会参加支援―

代表理事

● 小林七子

世の男性は通常、定年退職後、地域社会に初めて目を向け始めるが、女性の出産育児を体験した時に地域社会の存在と、その重要性に気がつく。

NPO法人「子育てコンビニ」の会員たちは、育児・産休中のキャリアの方もいるが、出産までは男性と一緒に仕事をしていただければ、さまざまな事情で出産後仕事を続けられなかった経験を持ち、何らかの形で社会参加を求めて入会してくる。

当初はネットや紙媒体で
子育て情報を発信

NPO組織ができたきっかけは、三鷹市のサイト「みたか子育てねっと」の中の「子育てコンビニ」という、市民が自らの手で情報を集め発信するコーナーのボランティア募集だった。



総務大臣表彰式直後のNPO忘年会



映画「bloom」からのひとコマ



街中にみんなで貼ったポスター

護者のための家庭教育支援のコミュニティ「かきしぶ」を立ち上げ、その運営も手掛けている。

この活動では、ネットの良いところを生かしながら、オフ会などを通じて顔の見える関係を大切に、昔の井戸端会議のようなものをネット内で展開している。

母になった女性の声を集め
ドキュメンタリー映画製作

また、一人の会員が「映画を作りたい」と言い出したことで実現した、母になったばかりの女性たちの声を集めたドキュメンタリー映画「bloom」（二〇〇八年完成）は、完成後自主上映会が静かに広がり続け、この二月で全国六十六カ所で上映されている。

「悩んでいるのは自分だけじゃないと思った」「出産前に見ておきたかった」「共感して涙が止まらなかった」など、数えきれないほどの感想をいただいた。

虐待や子どもをめぐる事件、地域社会における人間

関係の希薄さが原因で起きたさまざまな事件が、毎日のように報道されている。「bloom」で語られる出産後まもない女性たちの声は、まさに子育てのスタートに立ち、喜び、不安、期待を胸に抱いて地域に一步を踏み出そうとする母たちのものといえる。

子育てをすることは、地域とのつながりを深めていくことであり、人間関係を広げ、大人として人間として成長していくことだと思っている。

そのスタートに立った女性たちや、その家族、また、これから子どもを育てる世代の一人でも多くの方に「bloom」を観ていただきたい、との会員たちの思いから、来年度は、DVD製作・販売を予定している。

映画製作時のスタッフでプロジェクトチームを再編成し、企画段階からNPOらしく、手作りで進めていきたい。全国各地でいつでも「bloom」を観ることができると、会員一同の願いである。

NPO法人子育てコンビニは、東京の郊外にある三鷹市という人口約十七万人の都市で、子どもたちが豊かな人間関係に生まれやすく育てていくことを願いながら、今後活動が続けていきたいと思います。

くろべ漁業協同組合

魚の駅「生地」が特産品の販売拠点に
―漁業振興と地域の活性化を目指し―

魚の駅「生地」支配人 ● 富山俊二

黒部峡谷、宇奈月温泉で有名な清流黒部川の扇状地、左岸の海岸添いに広がる富山県黒部市生地地区。扇状地を通り抜けた伏流水が町のあちこちに湧き出ている名水の里として知られる。

一方、かつては樺太、北方四島など漁場開拓へ出かけた歴史があり、県東部の漁業基地として栄えた港町でもある。

しかし、世界的にも有名なYKKをはじめ、工場の進出と二百カイリ問題が漁業就業者人口の減少をもたらすとともに、少量・多品種を水揚げする漁獲物の価格低迷が、地区漁業の将来に危惧を感じていた。

漁協から浜を!!

魚価の低迷に苦しむ漁協内で直販施設の建設が議論され、地区代表や

消費者も加えて検討委員会が組織された。一方、鮮魚商や仲買人組織する組合が猛反対し、数十回の会議の結果、漁協が買産権を取得することで決着した。

そして、平成十六年十月魚の駅「生地」がオープンした。同施設で組合員が、市が開設している黒部市水産物地方卸売市場へ水揚げした漁獲物を職員が競り落とし

た魚を中心に、隣りの加工工場で作られた地魚の一夜干し（生地の塩物）や水産加工品、県内の名産品などを販売する「とれたて館」と浜の料理を提案する「できたて館」の二棟からなる。



親子料理教室のようす



創業祭のようす



買い物でにぎわう店内

その間には広いウッドデッキがあり、憩いの広場として、また、夏はビアガーデンとして使われるほか、年に数回行われるイベント広場の役目を持つ。

同施設を通じ、魚や漁業情報、食文化を発信するための「料理教室」「一夜干し教室」「ガラス玉網かけ教室」なども行われている。

「魚の駅生地」には
年間30万人が訪れる

同時期から地区の活性化の議論が湧き出し、地域資源の見直しと交流人口増の目標が立てられた。

地区には、伏流水の湧水を利用した各町内にある共同洗い場、船の入出港のたびに旋回する世界的にも珍しい生地中橋、海底地下道等があり、町を散策する人達の増加に「まち歩き実行委員会」も組織され、もてな

しの活動が活発になるとともに、ボランティア・ガイドの会が再結成され、その案内人数はますます増加してきた。

平成十八年には、前述YKKが魚の駅「生地」をコースにとりいれた産業観光を開始したことも相まって、同施設は年間三十万人が訪れる町の観光の拠点としての機能を発揮している。

魚価の底支えと後継者

魚の駅「生地」の食文化を発信する活動は、地域だけではなく県内外に理解者が増え、未利用魚の付加価値向上、黒部産魚のブランド化につながり、市場では組合員の漁獲物を買収する機能を發揮して、今では年間二十五万人が来店する施設となった。

NPO法人小谷山村留学育成会

山村体験受け入れで都市と交流 ― 農林業、伝統芸能に触れる子どもたち ―



理事長

● 北村 正

小谷村は長野県の北西部、冬には積雪二メートルを超える豪雪地帯にある山村である。

村内のスキー場には、最盛期には年間百万人以上のスキー客が訪れたが、現在では三分の一程度に落ち込んでいる。また、一時は約八千人いた人口も現在は半分以下になり、少子高齢化と限界集落化が進行している。

山村留学制度を廃止 そして復活、苦難な船出へ

私たちの住む村北部の中谷地域でも子供の数が激減したことから、村が「山村留学制度」を創り、過去二十十年間で延べ八百人の子供たちを受け入れてきた。

留学生は地域に住み、住民も里親となって子供たちを受け入れ、その元気に学び暮らす姿から元気をも



●●●

らった。卒業生はその後、村に定住したり、県外での村の応援団となったりして、かけがえのない存在となっている。

平成十八年度に村内の小学校が統合され、山村留学制度は廃止されたが、制度の復活が中谷地域に「元気



●●●

をもたらし」と考え、住民有志が「NPO法人小谷山村留学育成会」を設立し、山村留学の復活に取り組み始めた。

しかし、復活には運営資金の確保が難しく、一時はあきらめムードも広がったが「いつか必ず復活を」と、夏休み期間の短期山村体験活動の受け入れや、地域に残る棚田を利用した米づくり体験ツアー、雪祭りなどを通じて都会の人たちとの交流活動が続けてきた。

脚本家との出会いを機に 創作劇の上演など新展開

一昨年、体験ツアーに訪れた都内の脚本家との出会いをきっかけに、小谷の厳しくも素晴らしい自然や、その中でたくましく暮らす人々の生

活、息づく文化などを多くの人に知ってもらうことも地域の活性化につながる」と考え、伝統芸能を取り入れ、住民が自ら出演する創作劇の上演を計画した。

昨年の春には地元の獅子舞などを取り入れた「当世小谷田楽」を上演し、村内外からたくさんの方々を訪れていただいた。

皆がアイデアを出し、助け合うことで、地域のつながりを確認する機会にもなり、また、訪れた人が劇の鑑賞ばかりでなく、小谷の自然や文化に触れる場となるように、地域活性化の新たな展開として取り組んでいこうとしている。

村全体の活性化を支援

私たちは、農林業体験や山村の伝統文化に触れることも山村留学であると考えている。

今後も交流を深め、都会の皆さんには小谷に来れば安らぎと癒しが感じられ、「第二の故郷」として愛してもらえる。また、村人も都会の人々との交流を通してここに暮らしていて良かったと思える、活き活きと活気があり、元気になれる。

そんな村全体の活性化につながるよう、村のお手伝いをしていきたい、と思っている。

木綿街道振興会

「雲州平田・木綿街道」でまちづくり —文化・景観を次世代につなげる取り組み—



事務局長

● 來間 久

木綿街道は島根半島・宍道湖の西岸に位置し、東岸の県都・松江市から出雲大社へ向かう中間地点、島根県出雲市平田町にある江戸期のたたずまいを今に残す町である。

この町に思いを寄せ、まちづくりを進めてきたのが、私たち木綿街道振興会である。

「木綿街道」の繁栄と衰退

出雲市平田町は、宍道湖につながる船川運河による水運を利用した木綿などの物資の集散地として城下町・松江に次ぐ繁栄を誇ったまち。

江戸後期から明治にかけては「雲州平田木綿」によって、木綿に関わる商人らによる文化の全盛時代を迎えた。明治中期になると、海外の綿製品的大量輸入によって木綿産業が衰退したため生糸へと転換し、明治

末期には、生糸の町として県下第一の工業都市としても栄えた。

その後、徐々に繊維産業は衰退し、また交通の面でも時代の流れで水運が衰退したことにより、平田は繁栄の歴史を閉じることになった。

数百年を経て繁栄を続けた平田の町には「切り妻妻入り塗り壁造り」という建物が軒を連ねる、特有の町並みが形成されていた。

その町並みの大半は残念なことに道路の拡幅などにより徐々に消失し、平成十年頃には船川運河沿いに忘れ去られた古い町並みを残すばかりとなっていた。

「この町並みの存在を多くの方に知ってもらいたい」「町並みを後世に残したい」との思いが発端となり、平成十三

年に「おちらと木綿街道」（おちらと：出雲弁で「ゆっくりと」の意）というイベントを開催した。

この時から、この界隈を「木綿街道」と呼び、町並みを利用した大きなイベントや町並み保存のための様々な活動を行うこととなり、木綿街道は歩みを始めた。

以来十年間、木綿街道に残る文化・歴史・景観などを活用して地域の活性化を目指し、また文化と景観を次世代に継承するための諸々の活動を続けている。

町並み保存の活動やイベントの数々

具体的には、▽「おちらと木綿街道」イベントの継続実施▽地域の食文化体感イベント「節分イベント」もち街・木綿街道の「継続実施」▽機械作り体験場「木綿屋」の設置・運営▽ホームページの制作・運営▽小・中学校、高校、大学の授業への協力

▽ボランティアガイド活動▽古民家（空き店舗）の清掃・活用実験——など。このほかにも、さまざまな取り組みを行ってきた。

木綿街道の始まりから十年を迎えたことで、これからの活動のコンセプトとして、①小路や架け出し・建物など風情あるたたずまい②街道にある酒・醤油・和菓子、また手づくりの品、伝統の技など歴史ある衣食住の文化③人の優しさや温かさのある暮らし——を掲げ、木綿街道の新たな魅力としてアピールしようと活動を企画しつつある。

この十年の間に地域に住む方々のなかに自分の町の歴史・文化・自分の住まいなどに対して誇りが芽生え、活動の応援をしてくれる人が少しずつ増えてきていることが何よりも嬉しい。感謝の心を忘れずに、これからも活動が続けていく決意を新たにしているところである。



木綿街道川並み風景



木綿街道のイベント風景



木綿街道本石橋邸

NPO法人こやだいら

山間地の「生活の足」を確保 ―過疎地域の団結と絆で支え愛―



理事長

● 阿部義則

つつ生活を営んでいる。

有償運送で交通弱者を支援 安否確認や情報提供も

徳島県美馬市は、県北部のほぼ中央に位置し、平成十七年三月に三町一村が合併して市となった。その一村が木屋平地域である。美馬市中心地から約三十八^{キロメートル}離れた山間地で、四季折々の風景美に囲まれた自然豊かな地域だ。

総面積は約百平方^{キロメートル}、人口九百十三人（昭和三十年六千五百人）、世帯数四百六十一世帯である。六十五歳以上高齢者数は四百七十人、一人暮らし高齢者百三十人、高齢化率は五二%と、過疎化や少子高齢化が急速に進んだ地域である。

木屋平には、標高四国第二位、百名山である剣山を源として、十五年連続で水質四国一の穴吹川が流れ、古くから流域沿いに定着し、豊富な資源や特性を活かしながら、農林業経営の取り組みと多くの課題を抱え

山間の遠隔地に住む高齢者を中心とした諸問題を解決するため、住民全員参加による意見交換会や協議会等を積極的に取り入れ、住民が運営する組織として平成十九年十二月、「NPO法人こやだいら」を立ち上げた。

事業計画は次のようなものだ。

- ① 過疎地有償運送事業は、交通手段を持たない交通弱者の移動手段「地域診療所の通院や検診・買い物・地域の会合等」として送迎する。
- ② 高齢者生活支援事業は、「安否確認訪問・情報提供・生活相談等」を行う。
- ③ 農林業作業支援事業は、「森林の伐採や間伐・果樹の収穫・草刈り・耕耘等」を支援する。
- ④ 防災活

動事業は、自主防災会と連携し、「防火訓練・机上訓練・炊き出し訓練・避難訓練・応急処置訓練」を中心に活動する。

⑤ 清掃活動事業は、毎年度地域において、河川、道路等の清掃活動を地域全員参加で行い、各集落単位でも実施し、特に不法投棄（地域外からの持ち込み）の監視や啓発活動、看板の設置等に取り組む。⑥ 自然保護活動事業は、近年、希少植物等が鳥獣による食害（シカ、サル、カモシカ）が急増し、絶滅が危ぶまれているため、被害調査、増殖計画、防護対策を進める。⑦ 地域おこし事業は、古くから地域に伝わる伝承文化を絶やすことなく次世代に伝えるため、再認識し、住民や小中学校生徒に継承指導する。

また、地域外との交流対策は、夏祭りや秋祭り、各種イベント事業を起爆剤として、帰省客や地域出身者、都市との交流

を図り地域の取り組みの理解と協力体制

づくりやIターン・U

ターンの地域定着化の推進

を図る。



有償運送



訪問調査

地域が明るくなり 住民が元気になった

数年前と現在を比較してみると、以前は、ほとんどの地域で人の動きも少なく、会議やイベント事業の参加者も減少し、高齢者は家で閉じこもりが多く、隣同士の付き合いもほとんどなくなっていた。

移動手段や支援の構築化により、診療所の検診、高齢者の生きがいづくり活動である「いきいきサロン」の参加も多くなり、地域外に買い物や生活用務等も増加した。

高齢者を残し、都会などへ出ていく人からは「安心して家族を地域へ任せる体制」ができ、大変喜んでいふとの話も聞く。地域に住む人々が、この地に愛着と誇りと責任を持ち「団結と絆で支え愛い」で、今を明るくそして将来に夢と希望が持てる地域にしたい、と考えている。

株式会社やまびこ

地場産品ブランド化で産業振興 ―特産品を開発、雇用創出・交流人口増も―



(株) やまびこ 支配人 ● 松本孝芳

四国中央市は、平成十六年四月一日に愛媛県の東端に位置する川之江市・伊予三島市・宇摩郡土居町・宇摩郡新宮村が合併して誕生した。

愛媛、香川、徳島、高知の四国四県が接する、まさに「四国の中央」に位置する自治体である。

高速道路網の整備により、四国の「エックスハイウェイ」の中心地と

なっており、県庁所在地のいずれにも、ほぼ一時間で結ばれるという好条件にある。

霧の森がある四国中央市新宮町（旧新宮村）は、人口の減少、高齢化、地域産業の低迷などの課題を抱え、「村の活性化と若者に夢を与える村づくり」を目標に、若者層を中心に定住化に取り組んできた。



憩いと癒しのスポット道の駅「霧の森」



新宮茶を使った特産品の製造



全国的人気の「霧の森大福」

「霧の森・霧の高原」の施設運営でやまびこ設立

このような状況の中、平成四年一月に高速道路が開通。平成六年度から五カ年をかけて、観光交流拠点「霧の森・霧の高原」を整備するとともに、平成十年六月十九日に、施設を運営する「株式会社やまびこ」を設立した。

新宮インターチェンジと塩塚高原周辺に新たな文化の創出と、若者層を中心とした雇用の場を確保し、都市との交流を通じて農山村地域における産業振興と地域活性化を図ることを目的にしたものだ。

旧新宮村は、もともと山茶が自生しており、お茶の栽培に適した地域で、無農薬で香りの高い安全なお茶が作られている。

そこで霧の森は、「お茶と癒し」をコンセプトにした施設づくりを目指して、新宮茶を原料とした特産品の開発に取り組んでいる。

その中でも特にヒット商品となったのが「霧の森大福」で、原料に使われているかぶせ茶

は、収穫の数週間前に黒いネットをかけることで甘みの強いお茶が出来る。上がる。

生産者の「安心・安全で美味しいお茶を楽しんでもらいたい」との想いのこもった、こだわりのお茶を、お菓子の原料として活用したことが大ヒットにつながり、霧の森大福のブランド化に成功した。

このことが、新宮茶の価値を高め、生産者の生産意識を向上させたほか、かぶせ茶を新たに生産しようとする生産者が現れるなど、茶産業の振興に役立ち地域の活性化にもつながっている。

地域が一体となった観光拠点づくり

霧の森大福が全国的に有名になることで、霧の森や霧の高原へ訪れる観光客が年々増加している。

そのことが、地域住民の観光地としての受け入れについて意識向上につながり、ボランティアによる霧の高原への道路沿線の草刈りなどが実施されるようになった。

また、四国中央市観光協会の呼びかけで、その沿線に桜の苗木を植栽する「桜ロード整備事業（仮称）」を計画中で、霧の森・霧の高原施設を中心とした、地域が一体となった観光拠点づくりに取り組んでいる。

伊予農希少植物群保全プロジェクトチーム

愛媛県伊予市

消えた海辺の植物を戻そう！
—地道な活動が同世代の環境意識を高める—

生徒代表

● 西山 鈴

愛媛県伊予郡松前町にある塩屋海岸は、一級河川重信川の左岸に位置し、延長約九百メートルの瀬戸内海に面した海岸です。自然と人が触れ合える親水工法を施したことや、県都松山市に隣接していることもあって、大勢の人に親しまれています。

私は、この塩屋海岸の近隣に住んでいます。瀬戸内海に沈む夕日が海岸を赤く染める夕まぎの瞬間と、五月下旬の淡いピンク色の花を

敷き詰めたハマヒルガオの群落が特に好きです。

しかし一方で、心ない人たちにによるゴミの不始末や不法投棄、訪れる人による海辺の植物の踏み付け、水際開発などにより、海岸の生態系に変化が表れています。

六人の先輩が始めた活動が 発展

私たちは「塩屋海岸から消えた海辺の植物を戻そう！」と二〇〇四年



若葉保育所訪問



郷土を美しくする清掃



園児との移植活動

五月に、六人の先輩が始めたプロジェクトチームで活動しており、現在は五十一人が所属しています。

当時、先輩は文献や聞き取り調査をしたところ、ナミキソウやビロードテンツキ、オニシバ、ケカモノハシ、ネコノシタ、ハマニガナの六種が塩屋海岸から消滅し、コウボウムギやオカヒジキなどの在来種、海辺の植物が消滅の危機にあり、シナダレスズメガヤやブタクサなどの外来種が侵入していること——などが分かりました。

そこで、外来種を駆除しながら、学校で学習した技術や知識を活かし、植生分布図を作成し、消えた種類の植物を近隣から採取し繁殖させ、地元の保育園児と塩屋海岸へ移植を行いました。その結果、今では、塩屋海岸から消えた六種類すべてが甦っています。

しかし、希少種保全の問題点は、最初の移植過程よりも定着後にあります。期間に終わりのない管理体制を、地域の小学校や公民館、行政、事業所、ボランティア団体と協力しながら行い、移植種が群落の一員として自立し、生き残り、生態系に溶け込んだ時、初めて移植が成功したと言えるからです。

このため、地元新聞に、毎月参加

を呼びかけるボランティア情報を発信しながら海岸清掃を続け、七年間で八〇回、一・五トのゴミを回収しています。また、松前町が実施している「郷土を美しくする清掃」にも毎年参加しています。

さらに、啓発用のポスターやデジタル教材CDを制作し、周辺の小学校や公民館に配布したり、大型啓発看板を海岸に設置したりしました。

現在では、重信川河口とその周辺の塩屋海岸のライブ画像が、誰でもいつでも見られるようにWebカメラを設置し、学校のHPにリンクさせ配信していますので、一度「伊予農業」で検索してみてください。これまでの活動の成果も掲載しています。

地域と一体で地域づくりに 貢献

私たちの活動は、新聞やテレビなどでたびたび紹介され、さまざまな場所で発表の機会をいただいています。これらの機会を活用し、生態系の保全という目的のため、地域と一体となり、先輩から後輩へと受け継ぎながら、地域づくりに貢献したいと考えています。今回、栄誉ある賞に推選していただきました松前町長をはじめ、関係の方々深く感謝申し上げます。今後ともご指導をよろしくお願いいたします。

地域ぐるみで子どもへの起業家教育 —小学生から若者までノウハウ伝授—



事務局長

● 横尾敏史

産官学連携で若者育成が 塾のミッション

鳳雛塾は、佐賀県内の産学官連携組織として、地元金融機関が人的資源を提供し、事務局の活動拠点となる場所を佐賀大学が提供し、佐賀県や佐賀市等の自治体が資金支援（補助金や事業委託）や情報提供するという、緊密なネットワークのもと事業運営を行っている。

鳳雛とは鳳凰の雛を指し、「未来の英雄」の意味を持つ。産学官の各セクターが共通の課題として掲げている「将来の佐賀県を担う子どもや若者を育てること」が鳳雛塾のミッションである。

鳳雛塾は、一九九九年十月に大学生および若手社会人向けのビジネススクールからスタートした。設立当初は、欧米のビジネス

スクールで活用されているケースメソッドを取り入れ、自分で考え、自分で学び、自分で行動できる能力を育成するとともに、ICT（情報通信技術）を有効に活用しながら、自宅で学習できるシステムや双方向型の遠隔授業などを実践してきた。その結果、地域内で起業家精神旺盛な若者が集まるコミュニティが形成され、志を同じくする人たちの強固なネットワークを築いてきた。

県内の経済活性化に 一定の成果

現在（第十二期）までの受講生は三百二十人に上り、全国的に注目されるIT起業家、地域活性化を目指すソーシャルベンチャーやSOHOビジネスを立ち上げた人、学生によるNPOの立ち上げなど、県内の経済活性化に一定の成果を上げてき

た。

二〇〇二年からは、それまで取り組んできた大学生および若手社会人向けの起業家教育を、小・中・高校生向けに新たに開発し、子どもたちに「生きる力」と「人とつながる力」（佐賀モデルでは二つの力をあわせて「起業家精神」という）を育む「キャリア教育事業（佐賀モデル）」を開始した。

二〇一一年一月末に中央教育審議会の答申で「幼稚園から大学生まで」キャリア教育を取り組んでいくという提言がなされたが、佐賀では先駆的に子どもたち向けの体系的なキャリア教育を実践してきた。

現在では、小学生で取り組む「キットスマート（販売体験活動）」「職業人インタビュー」、中学生で取り組む「提案活動付き職場体験活動」「製造販売体験活動」、高校生で取り組む「製造販売体験活動」「企画提案活動」

「コンサルティング活動」など、子どもたちの発達段階に応じたプログラムを開発し、学校のニーズに応じたキャリア教育を実践している。



小学生のキットスマート（販売体験学習）



大学生・社会人向けビジネススクール

地元産業界も巻き込んだ ネットワーク体制構築

また、佐賀モデルの特徴として、教育活動にこれまでは関わりの薄かった多様な地元産業界の方々を巻き込んだネットワーク体制を構築していることが挙げられる。

これは鳳雛塾の有する産学官連携による協力的体制がもたらすメリットであり、この意味で鳳雛塾の役割は人材育成の「場」を形成するだけでなく、とどまらず、産業界と教育界をつなぐ「コーディネーター」的な役割を担うようになった。地域ぐるみで子どもたちや若者を育てる環境を構築する仕組みが確立したといえる。

現在までのキャリア教育事業の実績は、実施校は延べ約六十校、対象児童生徒数約七千人、実施時間数は約三千時間、協力事業所数は延べ約千七百社となっている。

NPO法人ハットウ・オンパク

オンパク手法による地域活性化
―体験交流型イベントを集めて実施―

代表理事

● 鶴田浩一郎

オンパクが起る前夜

別府は一九八〇年代まで、団体型かつ歓楽的な大型温泉地として発展してきた。しかし、バブルが破綻した九二年以降の社会的変化により、衰退傾向が顕著に見えてくるようになった。

その後、危機感をもつ観光関係者や衰退を憂うる市民、地域の事業者たちが徐々に問題意識を共有することになった。

今では「観光まちづくり」と言われるようになった動きが、民間から自然発生的に、九五年ごろから生まれてくる。別府という土地が本来もっている魅力や資源にかかわる小集団が形成される。

そのテーマは「最大の資源・温泉のマンリア的な情報発信」「温泉と健



別府八湯全景



内成の棚田ウォーク



夜の竹瓦路地裏散策

康・医療」「長期滞在」「地域の人々の日常の食（今では「B級グルメ」と言われる）」「伝統的共同湯竹瓦温泉の活用」などであった。

二〇〇〇年から開始
倶楽部会員は七千人に

このような小集団を構成する個人の人モチベーションの高まりの中で、これらの動きを総合してプロデュースし、参加交流型イベントに

仕立てあげたのが「ハットウ・オンパク（別府八湯温泉泊覧会）」である。つまり、オンパクとは「温泉泊覧会」の略語だが、二〇〇〇年秋の第一回から数え、本年五月の開催で十六回目を迎える。

現在では、約七千人の「オンパク・ファン倶楽部」を抱え、参加交流型プログラム（現在「着地型商品」とも呼ばれる地域資源活用型商品）を制作する地場事業者は二百にも上る。

また、当初より持続可能な地域活性の仕組みづくりを構築するため、毎年変化し、進化させることを命題としている。開催回数や時々の重点商品開発など、試行錯誤の連続である。

過去には、マーケットが反応しなかった、滞在系の健康医療プログラムや携帯サイト構築など、時代に早過ぎた事業もあった。

新たなマーケット開発は、事業者の知恵やIT（情報技術）の進化などに依存することが多いが、新規の試みの成功率は、打率三割というところである。現在は、体験型のギフト商品化や新たなオンパクのシステム開発に取り組んでいる。

これからのオンパク進化

オンパクは、別府での十年にわたる地域活性の仕組みを標準化して、各地に普及する事業を二〇〇四年の函館湯ノ川温泉を手始めに拡大している。現在では二十九地域に及ぶようになった。

地域活性の手法は同じでも、現地で作られる参加交流型商品は、地域の個性豊かな商品群となって流通するようになり、それを作る地場中小事業者が元気になる素になり、ひいては地域を活性化する。

二〇一〇年四月には、オンパク開催地域を組織化する「社団法人ジャパン・オンパク」を設立した。

相互の現場でのノウハウを共有し、継続的組織の仕組みづくり、商品開発・顧客開発の手法研究などを行い、さらに進化を目指す集団にしていきたい。

荘園の里推進委員会

遺跡維持と生業確保の両立へ

―農地の基盤整備で世代越えた村おこし―



事務局長 ● 河野 二三

田染^{たしおし}荘は、宇佐八幡宮の「本御荘十八箇所」と呼ばれる根本荘園の一つである。中でも小崎地区は、古文書や絵図等により開墾の歴史が明らかにされており、中世の景観がそのまま現存する国内有数の遺跡であることが「国東半島荘園村落遺跡詳

細分布調査」の中でも明らかにされている。

歴史的価値のある遺跡の維持と高収益を目指す現代農業の両立の為、平成十一年「荘園の里推進委員会」を設立し、農水省の田園空間博物館構想を実施して最低限の農道・水路



●●●



●●●

を整備し、荘園領主制度とグリーンツーリズムを中心とした、田染荘独自の高付加価値農業を目指すことにした。

荘園領主制度の創設

荘園領主制度は、一口三万円で荘園米と地元農産物の発送＋田植え・収穫体験というシンプルな内容のものである。

しかし、単なる物売りでは長くは続かないため、田植・収穫体験時に早乙女や中世の衣装を貸し出したリ、張り子の牛のアトラクションで、中世の田植え風景をコミカルに再現したりした。

さらに、収穫した米を宇佐神宮に献穀する（もちろん中世の衣装に米俵を担いで）など、田染荘らしさに徹した。

荘園領主制度とグリーンツーリズム

農村民泊に加え、住民ガイドによる田染荘の史跡散策や各種農業体験、民芸品作り、語り部等「田染荘式農村民泊」を確立した。

また、水田裏作に菜の花を作付けて早春の風情を演出した。加えて、ホテル群生地である「小崎川」を都市との交流に生かそうと、六月上旬中旬の週末ごとに「ホテルのタベ」

を開催した。

内容は、単なるホテル観賞に留まらず、「ホテル籠づくり体験」や竹灯籠の点燈で、幻想的な世界を創出した。さらに、農産加工所を建設して、飲食店営業、惣菜、漬物の許可を取得し、観光客や交流客を対象に、食の提供や、付加価値の高い加工品販売を始めた。

田園空間博物館構想

かくして、水田があるだけだった小崎地区は、今では百五十口余の荘園領主を得て、御田植祭・収穫祭には毎回三百人を超す領主・交流客の方が参加している。

また、早春の菜の花、六月のホテル鑑賞には年間五千人が訪れる景勝地にもなった。

これらの努力が認められ、平成二十二年国選定「重要文化的景観」に選定された。

しかし、依然として高齢化・後継者不足の問題は残っており、「史跡と生業の共存」という当初の課題が解決されたわけではない。

これからも、時代の波に乗った振興方策を練り、田染荘式農家経営を、農業従事者にとってさらに魅力あるものに発展させ、千年の遺跡を、世代を超えて保全していきたい。

茨城県桜川市

官民協働で歴史町並み保存

「リピーター」で盛況な「真壁のひなまつり」



市長 ● 中田 裕

「寒い中、真壁に来た人を温かくもてなそう」と、住民有志のおもてなしの心から始まった「真壁のひなまつり」。九回目となった今年も二月四日から三月三日までの一カ月間、開催された。街中は江戸・明治・大正・昭和・平成の各時代のお雛さまや、つるし雛、石雛など百六十を超える雛飾りで彩られ、和やかにぎわいを見せた。

住民との交流楽しむ
リピーター

「真壁のひなまつり」の楽しみ方は、古い雛飾りや変わり雛など個性あふれる雛飾りを見ることができ、ことももちろんだが、主催者である地域住民がそれぞれ飾るお雛さまの由緒を語り、世間話に花を咲かせ温かく迎えることにつきる。

その結果、地域住民との交流を楽



ひなまつり1



ひなまつり2

しみに訪れる人がリピーターとなり、年々盛況になっている。

桜川市は、平成十七年十月に岩瀬町、真壁町、大和村が合併して誕生した。市北部の岩瀬地区に自生する山桜の群生は「西の吉野、東の桜川」といわれ、江戸期には玉川上水や隅田川など桜の名所に、数多くの山桜が移植されている。春には国の名勝天然記念物「桜川のサクラ」など山桜が見ごろとなる。

また大和地区では、一月十五日から三月二十一日まで、田園や里山の中で四十二人の芸術家に参加している野外彫刻展「雨引の里と彫刻二〇一一」が開催されるなど、地域活性化の取り組みも活発である。

「真壁のひなまつり」が行われている市南部の真壁地区は、関東の名峰筑波山の北側に位置し、四百年前の町割りの中に歴史的建造物が多く現存。古くから経済活動の中心地として栄えた。明治以降は旧岩瀬町、旧大和村とともに、良質な御影石の産地として、首都の建造物にも多くの石材を供給し繁栄してきた。

しかしながら、地域経済を牽引してきた石材業のバブル期以降の低迷や郊外型の大型商業施設に顧客が流出したこともあいまって、地元商店街の低迷に拍車をかけた。

そのような中、地元の良さを再発見し、地域活力を取り戻そうと立ち上がったのが、住民有志による市民団体「デイスカパーまかべ」（平成五年設立）である。歴史的建造物の調査や行政への提言、蔵を使ったコンサートや絵画展、マップや案内板の設置などを積極的に実施し、その後の

多くの市民団体の活発なまちづくり活動につながっている。

これら住民の町並み保存等の取り組みがきっかけとなり、行政側でも合併前の真壁町時代に国の文化財登録制度を活用し、江戸・明治・大正・昭和の百四棟の歴史的建造物の登録を進めた。この頃から徐々に古い町並みを見学に訪れる人が多くなり、町並み案内ボランティアの誕生やひなまつりの開催につながった。

重要伝建保存地区に
県内で初めて選定される

住民によるまちづくりの進展とともに、行政側も駐車場やトイレ、電線地中化、街路整備を進めた。現在は景観にも配慮したコミュニティ施設と歴史展示などの機能を備えた多目的複合施設が整備中で、まちづくり活動の拠点として期待される。

平成十五年、真壁町時代に当時の地域づくり総務大臣表彰を受賞しており、昨年六月には全国で八七番目、関東では四番目、茨城県では初となる国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

今回の自治体部門での受賞は、地域住民と行政が連携し、継続してきた取り組みが評価されたものであり、今後も市民とともに少しずつ前進していきたい。

神奈川県小田原市

市民自治実現へ新たな手法に挑戦 ―「市民の力で未来を拓く希望のまち」へ―



小田原市長

● 加藤憲一

平成二十三年度からスタートする新たな総合計画の策定に向け平成二十一年度は、かつてない規模で多くの市民、市職員が関わって作業が進められた。その際の取組がホールシステムアプローチによる総合計画の策定である。

全面的な市民参画による計画策定

暮らしに身近なテーマを、市民が主体的に自らの生活観を持って議論していただくため、ブライヤンクス



庁内オープン・スペース・ミーティング



おだわら TRY フォーラムオープニング

ツエレ（注*）を活用した手法を導入した。これは、市政に関わったことのないサイレントマジョリティを掘り起こすことで、市政運営への市民参画の裾野拡大や、新たな地域の担い手が生まれることに期待したものだ。

この取組は「おだわら TRY フォーラム」と命名し、無作為抽出で三千人の市民に招待状を送り、二百人の方に承諾いただいた。六月から八月の土・日曜日を使って実施し、

最終日には約百八十人の市民による討議が行われた。今回の縁で、初めて顔を合わせた人たちと様々なテーマに関して活発に議論を交わす。職員は議論のサポート役に徹し、ひたすら市民の皆さんの意見に耳を

傾ける。多様な意見が手際よくまとめられ、発表担当者が聴衆の前で堂々とプレゼンテーションを行う。本市で初のチャレンジがうまくいくかどうか、企画した市職員たちの心配が嘘のように、和やかで快活、そして建設的な雰囲気になった協働の場が生まれていた。

もう一つの取組として、市内にある二十五の自治会連合会の区域ごとにまちづくりに係る「地域別計画」を作成した。

これは地区ごとに設置した検討委員会にとっても、大変重要なチャレンジであった。検討委員会は地区の各種団体の役員などで構成され、現状把握と課題整理、今後の地域づくりの方針などを議論し、計画化していった。

こうした作業は、市職員が事務局としてサポートしつつも、基本的には地域住民自らが行った。検討委員会では、各地区でその底力を発揮しての熱心な作業が進められ、地域への想いの深さと絆の強さを改めて実感した。

多くの市職員の主体的な関与による計画策定

一般的に、総合計画の個々の文章はわずか数行でまとめられているものだが、そこに込められた想いや背

景は自治体ごとに実情が異なり、そうした目に見えない部分を個々人が共有し「見える化」する必要があると考えた。

そこで新たに考え出されたのが、施策ごとに未来に向けたストーリーをきちんと描く「シナリオ・プランニング」と、市職員が本音で未来を語り合える自由な対話の場となる「オープン・スペース・ミーティング」の実施であった。

担当の枠を越えて市職員同士が対話し、今まで以上に視野を広げて計画づくりに取り組むとともに、役職や組織、年代などの垣根を越えた議論を行うことができた。

総合計画は「新しい小田原」を実現するための設計図であり、工程表である。基本構想には将来都市像として「市民の力で未来を拓く希望のまち」を謳っており、私たちの強い意思が込められている。市民の想いをどこまで汲み取れたかは謙虚に考える必要があるが、実践段階では市民の力・地域の力を最大限発揮していただき、確実に形にしていきたい。

*ブライヤンクスツエレとは

一九七〇年代にドイツで考案された市民参加の手法。無作為に抽出された市民が行政や生活課題等に関し討議を重ね、自らの発案のもとに解決策を探るものがある。

和歌山県北山村

バーチャル村民は人口の30倍 —小さな村のICT活用による成功事例—



村長 ● 奥田 貢

人口五百人、 唯一の飛び地の村

北山村は紀伊半島の東南部に位置し、人口は約五百人。周囲を奈良県と三重県に囲まれ、和歌山県内にありながら、県内のどの市町とも隣接していない、全国唯一の飛び地の小さな村である。

面積は約四十八平方キロメートルで、全体の九七%が山林である。かつては優良な紀州杉に恵まれ、伐採した木材を筏に組んで北山川を流し下した「筏師の村」として栄えた。

しかし、基幹産業である林業の衰退と北山川の電力ダム建設により、住民の生活環境は大きな変化を余儀なくされた。

現在は筏流しの伝統技術を活かした「観光筏下り」と地場特産物の柑橘類である「じゃばら」を活用した

地場産業を中核とする、観光立村を目指して頑張っている。

これに加えて、これらの地場産業を支援するツールとして、ICT（情報通信技術）の活用積極的に取り組んでいる。

「ブログ」を活用した

地域密着型のポータルサイト

平成十九年の春には全国初となる自治体ブログポータルサイト「村ぶろ」の運営を開始した。

村ぶろの基本理念は、①地域に密着したブログとして地域情報を発信、北山村の応援団を全国に構築し地場特産物の販売促進と地域活性化を図る、②ブログ運営は、ブログ内での広告収入やブログシステム利用による収益等で行う——こととし、村の財政負担とならない運営を目標に取り組んでいる。

平成二十二年八月現在での状況は、会員数（バーチャル村民）は人口の約三十倍の一万五千人余。アクセス数は一日当たり、約三十万PVとなっている。

これまでに取り組んできたネット通販と村ぶろが効率的に融合した総合的システムとしてICTを活用したことで、地場特産物の販売や地域情報発信など、地域活性化にも大きく寄与している。

特産物「じゃばら」の販売は、十数年前には年間二千万〜三千万円程度の売上高だったが、ICTを活用した販売促進に取り組んだ結果、平成二十一年度では二億六千万円余に達し、往時の十倍にもなる成果を上げている。

また、村ぶろシステムは、民間をはじめ地方自治体にもその運営の輪を広げており、地域間のユーザー交流の活発化や外部への地域情報の



●●●



●●●

発信が大きく期待されている。

「若者定住策の一環として 「観光筏下り」も定着

一方、「観光筏下り」も若者定住施策の一環として、全国から後継者を募集し、筏流しの伝統技術を継承し存続させている。現在では、観光筏下りが北山川の夏の風物詩として定着し、全国各地から多くの方々が訪れている。

この度の「地域づくり総務大臣表彰（地方自治体部門）」の受賞はこれらの取り組みが評価されたものと地域住民はじめ関係者一堂、大きな喜びとともに励みになっている。今後は、この榮譽に恥じることのないよう一堂力を合わせ、さらなる地域の発展のために邁進して行く決意であります。

和歌山県田辺市

世界遺産を活かした観光地づくり
―官民協働による独自の観光政策展開―

田辺市長 ● 真砂充敏

世界遺産である熊野古道や熊野本宮大社を始め、良質で趣のある温泉地（日本三美人湯で知られる龍神温泉、日本最古の温泉といわれ、温泉として唯一世界遺産に登録されている湯の峰温泉等）といった多くの観光資源を有する当市では、観光をまちづくりの大きな柱の一つと位置づけ、各種施策に取り組みとともに、民間団体との連携を強化するなど戦略的な観光振興の推進に取り組んでいる。

世界的観光地を目指す
熊野ツーリズムビューロー

市内の各観光協会と市が連携し、市内に点在する優れた観光資源を戦略的に発信し、世界各地からの誘客を促進するために設立した田辺市熊

野ツーリズム・ビューローは、国際観光推進員としてカナダ人職員の雇用を始め、市内各施設や看板等の日英併記化、ガイドの育成等質の高い持続可能な観光地を目指し、受地としてのレベルアップに努めるとともに、国内外でのプロモーション活動を積極的に展開している。

特に、同じく巡礼道として世界遺産に登録されているサンティアゴの巡礼道を有するスペインのサンティアゴ・デ・コンポステラ市観光局との共同プロモーションをスタートさせるなど特色ある情報発信を行っている。

また、海外からの旅客者にも対応



熊野古道健康ウォーキング



田辺市熊野ツーリズム・ビューローの活動写真

可能な着地型旅行事業（DMC）を推進するため、昨年、組織を法人化するとともにDMC事業部を立ち上げ、本格的な受け入れ事業にも取り組みだしている。

ヘルスツーリズムでは
熊野で健康ラボも展開

熊野古道や温泉等の優れた地域資源を活用したヘルスツーリズムを展開することにより、都市との交流拡大、地域活性化を図るため、和歌山県、田辺市、民間事業者の三者協働により立ち上げたプロジェクト（熊野健康村推進事業）の延長線上で、（財）和歌山健康センター・熊野で健康ラボを実施している熊野古道健康ウォーキング等のヘルスツーリズム事業は、最近マスコミからも注目を集めており、年々参加者（特に、若い女性やリピーター客）が増加している。

市としても健康をキーワードとし

た観光戦略は、これからの観光地づくりにおいても、必要不可欠なものであると考えており、連携を密にしながら、新たな施策の展開を図っていきいたいと考えている。

その他の観光連携事業

県域を越えて取り組んでいる奈良県十津川村との観光圏事業は、両市村の民間事業者と行政が協力し取り組んでいる広域観光事業であり、観光地としての魅力アップを図るための各種観光事業（共通宿泊割引券事業、各種イベントや看板整備事業等）を展開している。

また、「田辺市地域ブランド推進協議会」では、日本一のブランド力を持つ紀州南高梅を始めとした市内で生産されている各種地域産品の販路拡大に向けた情報発信等を観光と連携しながら取り組むなど、広く地域資源を活用した観光戦略を継続的に推進している。

この度、私たちが行ってきた官民協働による諸施策が評価され、地域づくり総務大臣表彰をいただいたことは、誠に光栄であり、今後は、この表彰を励みとして、さらに良質で持続可能な観光地づくりを進めることにより、田辺市の活性化につなげていきたいと考えている。

島根県飯南町

島根県飯南町

森林資源を活用し「癒し事業」 ―過疎の山村をセラピーで活性化―



飯南町産業振興課 主任 ● 三島光暁

飯南町は、島根県と広島県の県境にあり、標高四百五十メートルの高原地域である。ここには斐伊川、神戸川の源流があり、古くから源流沿いに広がる農耕地でコメや野菜などを生産する、農業を中心とした町だ。

この豊かな自然の中で、飯南町森林セラピーは、自然と歴史・文化を活かしたプログラムを提供している。「飯南町ふるさとの森」を拠点に森林セラピーガイドによる散策

と、温泉、食事を中心にプログラムを作り、より健康意識を高めるために健康チェックを行う。

「森林セラピスト」が 各人に合わせプラン作成

プログラムの提供方法として、皆さまの予定や体験したいことを当町の「森林セラピスト」が提案し、各人の状況に合わせたオリジナルプランを作り上げる。

プログラムの内容として、まず健康チェックを行う。ボディチェックなどの調



「薬膳料理」でカラダの中から健康づくり



森林セラピーガイドと共に森林散策



呼吸法や瞑想などをとり入れさらに癒し効果を

査や、看護師・保健師による健康相談、POMSという記述式の心理調査で現在の状況を知り、散策方法などを提案している。

ただし、最終的には皆さまの気持ちを私たちが受け、「このプランの主役は皆さまである」ということを基本にしている。森の中では、森林セラピーガイドが散策のお手伝いをする。

基本的にゆるやかなコースを設定し、ゆっくり時間をかけて歩く「ゆっくり散策」や、少し負荷のあるコースでの「ウォーキング」、そして「植物観察」――の三つを設定している。森を歩く経験が全くない方は、最初の「ゆっくり散策」をお勧めしている。

休憩と散策を繰り返し ストレスを解消する

飯南町の森林セラピーは登山ではない。また、何か目標を定めて行っているではない。皆さまの状況をガイドが判断して、休憩と散策とを繰り返して行う方法である。

皆さまは、仕事や家事などいつも頑張っている。頑張った末にまだ頑張るために、ストレス過多の状況になる。飯南町に來られたら、頑張るのをやめて、心穏やかにゆっくりしていただきたい。

森林セラピーでは、食事は重要なポイントである。当町は、源流と高原の地を活かした農産物と季節ごとの山の幸も豊富にある。

この地元食材をふんだんに使った薬膳料理、山菜弁当など提供している。旬の物を旬の時期に食べることから、体の中から衣替えをし、その季節にあった「カラダづくり」をしよう。食事からも五感を感じながら食べるということがするのも飯南町ならではの、と考えている。

飯南町は三カ所に温泉がある。摂氏三八〜四〇度と副交感神経を刺激する温度となっており、散策後にはより「癒し効果」を高めるため、ご案内している。

このように、健康意識を高め、運動と食事・温泉を組み合わせて最大限の癒し効果を得るよう態勢を整え、皆さまのお越しをお待ちしています！

【お申込・お問合せ先】

「森で休もう！〜飯南町森林セラピー〜」
(株)フロンティアあかぎ
飯南町里山コミッション事業部（島根県
知事認定登録2-80）
電話 0854-76-2903
FAX 0854-76-2040
HP アドレス：http://www.iman.jp/forest-therapy/

高知県・高知県奈半利町・大月町商工会

県庁業務をアウトソーシング ―市町村のSOHO育成、産業創出も―

高知県地域づくり支援課

県内全域から参加可能に

高知県では、民間との協働促進や雇用就労機会の創出によって、地域を活性化することを目的として、「地域版アウトソーシング」に取り組んできた。

この「地域版アウトソーシング」は、県庁業務の中で、ホームページ作成、会議録作成、調査、データ入力など履行場所の制約を受けない業務をテレワークによって発注し、高知県内全域からの参加を可能にした取組である。

「地域版アウトソーシング」は平成十六年から、発注側（高知県）の仕組みづくり（離れた地域への発注方法の検証等）や、受注側の人材育成（Eラーニング等による学習機会の提供等）が行われた後、平成十九

年から本格的にスタートした。

また、県では奈半利町や大月町をはじめとして、市町村の職員や役場に駐在する県職員（地域支援企画員）との連携のもとに、地域事業者の発掘、育成に取り組んできた。

役場や商工会とのコラボで 行政への関心高まる

その結果、「地域版アウトソーシ



遠隔地授業の様様



独自開発された商品

ング」に参加して業務を受注するだけに止まらず、役場や商工会との協働や地域の事業者とのコラボレーションにより地域や行政への関心が高まり、地域活性化、産業振興を目指して活動の幅を拡げはじめる住民グループもでてきた。

それが「やはりテレワーカークラブ」と「大月町アウトソーシング研究会」である。

高知市から東へ約六十^{キロ}の位置にある奈半利町（人口三千六百八十七人）では、厚生労働省の地域提案型雇用創造促進事業の採択を受けて発足した住民グループ「やはりテレワーカークラブ」が「地域版アウトソーシング」に参加した。

さらにこのグループは、地域の特産品開発グループとの連携による新たな一・五次産品の開発をはじめ、

既存の商品の販路拡大プロジェクトの実施、観光情報の発信など、さまざまな活動も実施している。

また、人材育成を行

うNPO法人「奈半利ワークWEB」も設立され、平成二十二年度からは地域ICTふるさと元氣事業の採択も受けて、両グループで新たに人材育成事業を展開するなど、活動の幅を拡げている。

地域の独自商品開発、 観光事業の動きも

高知市から西に百六十^{キロ}の大月町（人口六千二百六十九人）では、商工会青年部が「地域版アウトソーシング」に参加するにあたり、青年部内に「大月町アウトソーシング研究会」を発足させ、住民向けのパソコン講座、テーク起こし講座などを行い、テレワーカーを育成した。

その後「大月町アウトソーシング研究会」が独立し、商工会の支援のもと、「地域版アウトソーシング」への参加のほか、大月町の地域資源を活用した香り商品、食品などの商品開発を行っている。

また、商工会を中心とした観光事業「牧野富太郎の道を歩く」プロジェクトにも参画している。

「地域版アウトソーシング」をきっかけとして、これらのように地域の公共経営を担う事業者の育成につながっている事例もあり、今後も地域の活性化と人材の育成という視点から、この取組を継続していきたい。

野老真理子氏

百五十を超える地域貢献活動 ―地域のニーズに即し手づくり事業展開―



大里綜合管理（株）代表取締役社長

「創立以来、仕事のできた九十九里地域に感謝し、待ったなしの環境問題や社会問題を真正面から受け止め、この地域における社会的責任ある企業として、豊かなまちづくりの一翼を担う」

こうした会社の基本方針の下、巡り合った課題を「仕事ではない、お金にならない」と避けるのではなく、私たちに何かできるかと考え、一つひとつ積み上げてきた。

「気づきの訓練」から生まれた取り組み

「住民一人一貢献」を合言葉に、より多くの人たちとの出会いを通して「語りあいの場」や「活動の場」をつくり支えていく、とやってきた私たちの活動は二〇一一年一月現在、学童保育を始め、コンサートや講演会、駅・海、道などの清掃活動

など、数えると百五十種類にもなった。

これらの取り組みは「気づきの訓練」として、毎日一時間の清掃活動から生まれてきたものだ。

その瞬間に気づけないことがどれほど大きな事故につながってしまうのか。それを体験したわが社では、危険に気づく、お客様の気持ちに気づく、世の中の流れに気づくなどなど、毎日一時間、身の回りの物をきれいにすることを通して、さまざまなことに気づいてきた。

そして、気づいてもやらなければ気づいていないのと同じと気づき、気づいたことは行動しようと積み上げてきた。具体的には、引き出し

の中の鉛筆がなくなっても、戻ってくるために一本一本に名前を付けた、同じ引き出しの中に同色同種類のペンが必要ないと減らしたり、机の引き出しは問題が隠れていると引き出しがなくなり、お客様とスタッフが飲む湯飲み茶碗を一緒にすることで置くスペースが半分になったりと、さまざまな改善をしてきた。

夜は使わない事務所を地域の活動に開放

昼間使っている事務所も夜は使われていないことにも気づき、机を移動してコンサートや講演会の会場として利用したり、使われていない会議室を時間で区切って地域に開放したり、お料理の好きな主婦の方に日替わりでシェフになってもらってコミュニケーションをやりとりしたり……と、その改善は会社だけでなく地域にも向けられていった。

これらを通してわかったことは、問題を持った人こそが真の解決者になるということである。だから、その問題を持った人が解決者になれるようにサポートしたり支えたりすることで、抱えた問題が自らの力で解決され、それらの過程こそがその人が中心となった一つの地域貢献活動なのである。良い街とはそんな主体者たちが集まる街ではないかと思っている。

今回の表彰は、私やスタッフたちをととても励ましていただいた。「こんなやりかたでいいのだ!」と言ってもらえたようで、喜びもひとしおである。これから目の前につづかってくるさまざまな課題や問題を避けないで、巡り合う人たちの力をよりどころにして、できることを一つひとつを積み上げていきたい。



10年間続いているクリーンロード



毎月開催している講演会「ねっと99夢フォーラム」



子どもたちと社員との合同の朝礼

清水康之氏

自殺対策の本質は「生きる支援」 —自殺のない社会の構築めざす取り組み—



NPO法人ライフリンク代表

私は、自殺対策の本質は「生きる支援」であり、それを総合的に展開することは「自殺のない生き心地の良い社会」を創ることだと考えている。というのも、自殺する人の多くは「自ら積極的に死を選んでいる」のではなく「さまざまな問題を抱えて追い込まれた末に死を選ばされている」からだ。

五百人を超える自死遺族の方々とライフリンクが協力して行った自殺の実態調査からも、そのことが明らかとなってきた。

自殺者が抱えていた 4つの要因

調査を通して分かってきたことの一つは、自殺で亡くなった人は平均して四つの要因を抱えていた、ということだ。また、属性によって抱えがちになる要因の組み合わせにも一

定の規則性があるということも分かってきた。失業者であれば「失業→生活苦→多重債務→うつ病→自殺」。勤労者であれば「配置転換→過労→職場の人間関係→うつ病→自殺」といった具合にある。

さらには、自殺で亡くなった人の七二%が「自殺する前に専門機関に相談していた」ことも分かってきた。しかも、その内の六割以上、全体の四五%は「自殺する一カ月以内に相談していた」というのだから、驚き以上に、これにはある種の恐ろしさを感じた。

前述の通り「自殺」と言っても、決して「自ら積極的に死を望んだ」わけではなく、むしろ最後の最後まで生きる道を模索しながら、結果的に十分な支援を受けることができずに、死を余儀なくされる人たちが大

勢いるということだ。

「自分は自殺するつもりはない。自分の周りに自殺しそうな人もいない。だから自分は自殺とは関係ない」と思っている人の中からも、自殺に追い込まれる人がいて、大切な人を自殺で亡くす人が確実にいる。

自殺防止に必要なのは 社会構造的な対策

私たちは、年間自殺者三万人という異常な事態が、この十三年間ずっと続いていることを「日本社会には、それだけの人たちが自殺で亡くなるだけの悪い意味での『条件』が整ってしまっている」と解釈すべきだろう。自殺は個々人の生き方の問題というよりも、社会的な環境の問題。社会構造的な問題であるのだ——と。であれば、自殺対策も当然、社会構造的に行わなければならない。

そこでライフリンクは、次の五つの柱を掲げて対策に取り組んでいる。



法制化を求めて署名活動を展開



官民の枠を越えた全国集会を開催

自殺対策百日プランといった「自殺対策の枠組み作り」、②効果的な対策立案のための「自殺実態調査」、③「自殺対策の都市型ネットワークモデル作り」、④対策が停滞しないようにするための「行政の監視」、そして⑤「社会への啓発」である。つまり、「社会の中に整ってしまっている悪い条件」を取り除くための社会的基盤を整え、その悪い条件を具体的に検証・解明する。そして、実際に悪い条件を取り除く作業を行うと同時に、そうした条件の中で追い込まれていく人を支える地域ネットワークを構築しようというわけである。

そのような活動を通して、ライフリンクは自殺のない「生き心地の良い社会」の実現をめざしている。

宮治勇輔氏

若い農業事業者に夢を与える
―農業の魅力発信、若者の就農を後押し―株式会社みやじ豚 代表取締役社長
NPO法人農家のこせがれネットワーク 代表理事 CEO

私は「湘南」として有名な神奈川県藤沢市で養豚農家を営んでいる。日本の平均の半分程度の規模で吹けば飛ぶような零細農家だ。後を継ぐ気は全くなかったが、起業を夢見て勉強するうちに、農業の抱える大きな問題点に気づいた。

一つは、一般的に農産物の価格は相場と規格で決められ農家に価格の決定権がないこと。もう一つは、生産者の名前が消されて流通すること。スーパーで販売される豚肉を見ても、それが自分のところで育てた豚の豚肉なのか、隣の養豚農家の豚肉なのかは全くわからない。

いつしか心は農業に傾いていった。「どうすれば実家の養豚業がよくなるのだろうか」

毎朝考え続け、「一次産業を、かっこよくて・感動があつて・稼げる3

K産業に」という言葉が閃いた。これで「会社を辞めて実家に帰って親父の後を継ごう」と決心できた。

実家に戻って始めたことは月に一回、メールニュースを配信して、地元の観光農園に友人を集めてバーベキューを開催することだった。

口コミで広がったみやじ豚

これが当たって、みやじ豚は瞬く間に口コミで拡がり、都心のビジネスパーソンや食や農業に関心の高い人たちの間で評判になった。

メディアにもひっきりなしに取りあげられ、「みやじ豚を扱わせて下さい」とレストランのシェフから電話がかかってくるようになった。

ここまでくると、規模の拡大に走るものだが、みやじ豚は家族経営の規模を維持することにした。そして

自分は、「一次産業を、かっこよくて・感動があつて・稼げる3 K産業にする」ために自分に何ができるだろうか、と考えるようになった。

そこで立ち上げたのが、「農家のこせがれネットワーク」だ。実家は農家だが後を継がずに都心で働いている「農家のこせがれ」が実家に帰ることが日本の農業を変革する最短最速の方法だと考えた。

現在、農家の平均年齢は六十五・八歳。一般企業なら、全員定年だ。これは農業界というよりも、日本人として考えなければならぬ問題だ。

詳細は拙著『湘南の風に吹かれて豚を売る』に譲るが、農家のこせがれネットワークの目的は、都心で働く農家のこせがれを唆して実家に戻ってもらう、親父（祖父）の後を継いでもらうことだ。

そのため

に、全国のおもしろい若手農業者ネットワークをつくり、彼らにはお手本になつてもらう。そして、東京には農



丸の内朝大学農業クラス課外授業



全国の農家と都心の応援者が集う

家やこせがれ達のテストマーケティングの場を用意する。

会社を辞める前に、少しずつ農業の魅力に触れてもらい、その気になつてもらおうという考えだ。

若者の帰農支援サービスも

毎週土曜日には六本木一丁目駅そばのアーケヒルズで「ヒルズマルシェ」を運営し、六本木駅そばには農業実験レストラン「六本木農園」がオープン。ネット上で農家と消費者の顔の見える関係づくりを推進するマイファーマーも立ち上がった。

今年は、こせがれたちの帰農をもう少し踏み込んだ形で支援するサービスを用意する。今後も東京を代表する農業支援NPOとして活動を加速化し、日本の農業をもっとおもしろくしていきたい。

大野長一郎氏

炭やきを通じ、能登の里山保全 ―伝統技術の継承、クヌギ植林活動も―



大野製炭工場 代表

炭やきにかける思いが
人を結ぶ

二〇一〇年十一月七日。遠く日本海を望む秋空の下、地元の中高生、

青年団、里山保全のNPOなど総勢約百二十人のボランティアが、石川県珠洲市の山地に広がる耕作放棄地に集まった。「おらっちゃんの森づくり運動」と銘打ったクヌギの植樹活動に参加するためだ。

これまでに約四千本のクヌギが植えられ、最初に植樹した木は炭材として利用することができるまでに成長した。だが、この活動は当初は自身が炭やきで生計を立てるためにどうすればよいかを考えた末に始めたものだった。

私は二十三歳で、父の炭やき工場を受け継ぎ、能登では唯一の専門で取り組む炭やき師である。

石川県の木炭生産量は、戦後ピーク時には年間約四・八万トンを産出したが、現在では実にその約〇・三%にまで減少している。

私自身は、能登での炭やきの再興を目指し、ナラの木炭に加え、茶の湯に用いられ高価格で取引される「お茶炭」の生産にも力を入れていたが、当地にはお茶炭に適したクヌギの木が少ないことに気づいた。

そこで、持続的に炭を焼き続けるため、まずは所有していた荒廃地にクヌギ一千本を自ら植え始めた。ただ、植林前の地ごしらえや草刈りなどの作業は、一人では到底追いつかず、途方にも暮れていた。

第一回植樹イベントには ボランティア50人が参加

身近に起こる環境問題や里山の荒廃を目の当たりにするたびに、私は

「炭やきという風土や伝統を活かした生業を続けることで、何か貢献できることがあるのでは…」と確信していた。このため、森づくりの意義や炭やきが果たす役割について、講演会や県内外の視察者への説明会などを通じ、語り続けてきた。

そして二〇〇八年には、私の呼びかけに応え集まった地元の仲間や、県内外のボランティア五十人による第一回植樹イベントが開催された。植樹に参加した方々の笑顔を見て、自分の思いが間違っていなかったことを感じ、炭やきを続けていく勇気をいただいた。

幸いにも、現在ではこの活動はより多くの方々の共感を呼び、地元NPO「能登半島おらっちゃんの里山里海」をはじめ、植樹活動を推進する東京のNPO「グリーンウェーブ」

の賛助もいただいている。

今後は、日本の伝統文化である茶道の関係者も巻き込んでの活動に発展させられれば、と願っている。

生命を尊重する社会に向け 自分にできること

昨年、名古屋で開催された生物多様性条約第十回締約国会議（COP10）。生物多様性の持続可能な利用について話し合われたこの会議で、日本が提案した「SATOYAMAイニシアチブ」では、能登の里山里海に息づく伝統技術や知識がクロールアップされた。

関連イベントの「JICA里山研修」で私の炭やき工場を訪れたアジア・アフリカ地域の研修生からいただいた言葉には、炭やきにける私の思いが伝わったことを実感した。こうして、地道にクヌギを植え炭やきを続けるこ



●●●



●●●

とが、「未来の里山」のメッセージとなり、地域や風土、生きものの多様性、そして生命を尊重する社会へと近づくきっかけとなれば…と考えている。

個人表彰

数馬嘉雄氏

石川県能登町

能登の伝統素材をブランド化 ―「醸しの里」で繰り広げる地域おこし―



数馬酒造株式会社 代表取締役社長

し、磨き続けている。

石川県能登町は能登半島の先端に位置し、平成十七年三月に「能登町」「柳田村」「内浦町」の三町村が合併して誕生した町である。生家は藩政時代に味噌、醤油の醸造を手掛け、明治二年から百四十年あまり、酒造りを続けている。

物心ついた時から酒造りを目にしてきた私が、能登半島の発酵文化を見つめ直し発酵産業で地域の活性化ができないかと考えていた時、最も能登らしくて面白い素材「いしり」にたどり着いた。

日本三大魚醤油の一つ 「いしり」をイメージアップ

能登半島に古くから伝わる「いしり」は日本三大魚醤油の一つで、イカやイワシが原料である。以来、「醸しの里 能登」をキーワードに、能登ならではの地域資源を掘り起こ

し、磨き続けている。

平成六年から町商工会長に就き、平成十五年からは能登半島の有志で結成する、地域おこしグループ「NPO法人能登ネットワーク（前身は能登空港ネットワーク協議会）」の初代理事長を四年間、務めた。

商工会長就任後は「いしり」のブランド化に取り組み、平成十一年から三年間「い・か・い・か味噌・いしり料理コンテスト」を開催した。平成十三年には、能登ネットワークと連携して「能登魚醤フォーラム」を実施した。

さらに平成十七年から四年間、「ジャパンブランド育成事業」に取り組み、服部幸應氏や小泉武夫氏、道場六三郎氏（石川県出身）の協力を得ながら、「いしり」のイメージ浸透に努めてきた。

NYの一流シェフも評価、和食以外でも通用する味

ニューヨークで「いしり」の展示会を行い、マンハッタンの和食レストランで開いた「いしり」ディナーショーでは、現地の一流シェフや料理研究家たちにも認められた。その時、「いしり」の可能性は無限大であり、和食だけでなくフレンチやイタリアンなどにも通用する味だと実感した。

しかし、「いしり」は、原料、塩、漬け込み方、熟成期間など、生産者がそれぞれこだわりを持って作っている。それゆえ、それぞれ味が異なっているのも事実で、それらを尊重しつつ、安心して購入できる基準やシステム作りを関係者と一緒に考えていきたいと思っている。

平成十五年の能登空港開港を視野に、それより四年前の平成十一年、「首都圏と能登の縁を結ぶ場」「東京における能登の玄関口」を作ろうと、



世界サミットで「いしりポテトスープ」を振るまう

能登ネットワークのメンバーの出資で銀座に「能登料理居酒屋」と「だらばち」を開店した。そこが首都圏から能登に人を呼び込む強力な「前線基地」となっている。

能登の最大の魅力は 能登で暮らす人たち

「醸しの里 能登」構想の心の醸しでは、能登で暮らす人たちが能登の最大の魅力と考え、「能登人」との交流を中心としたプログラム開発も進めている。

平成十九年に起きた能登半島地震で観光客が減少した能登へ「能登人」の魅力で人を呼び込むためのエコツーリズムの推進にも取り組んでいる。これからも、自分を育んでくれた郷土「能登」を大切に、素敵な仲間たちと一緒に元氣な能登づくりに邁進していきたい。



ニューヨークのディナーショーに向け「いしり」を紹介

水野龍二氏

山々と人々の心に花を

—都会人が安らげる夢ふるさとづくり—



池田町

● 水野龍二

過疎化が進行した山間地ゆえ

私の住んでいる陸郷は、北アルプスの山懷に抱かれた安曇野の平野の東側に位置し、小さな山々が入り組んだ山間地である。

昔の産業と言えば、大小麦、大豆、養蚕で細々と生活を営んでいるそんな地域だった。昭和五十年頃より過疎化が進行し、百数十戸あった家も、今では二十数戸に激減してしまった。そんな所である。

子どもの頃、町へ行って「僕はどこの子？」と聞かれ「陸郷」と答えると「えれー所から来たなあ、氣をつけて帰れよ」と、よく言われた。

なんで僕のふるさとは、人から見て、えれー所なのか…そんなに悪い所なのか…自分が好きで生まれてきた訳じゃないのに、人から大変な所

だと耳にするたびに、子どもながらに悲しい思いをした。

そんな私だから、いつかはこのふるさとを人に自慢できるような所にした、と考えていた。私も養蚕農家として、十数年頑張ってみたが、オイルショック以後、繭の値段が下がり、生活できなくなってしまう、やむなく建設業へと転業した。

二十数年に渡り
三千八百本の桜を植栽

でも、心の中では、みどりの産業である農業への意識と憧れは強く持っていた。そして、平成元年に荒廃桑園を開拓し、「夢農場」という観光農園を開園、七万株のラベンダーを植栽するとともに、自生のヤマザクラの手入れをしながら、二十数年に渡り三千

八百本ほどの桜を植栽した。

しかし、過疎地に花を植えるなど、人々から多くの批判をされ「そんなことで人が来るようなら苦労はねえ」「龍ちゃんは、氣が狂ったただか」と言われていた。自分でも、ふと不安が頭の中をよぎることが多々あったが、「夢に向かって進まないと、夢は実現しない」と思い続けてきた。今では桜も大きく育ち、「西の吉

野 東の陸郷」と言われるようになり、お客さまが訪れるようになった。

春は桜に始まり、菜の花、カモミール、ラベンダー、アジサイと次々花の咲くように植栽を進めるとともに、ホタルが飛び、フクロウや数多くの小鳥がさえずり、野原では、ウサギ、リス、タヌキなど大小の動物が生息する所へ変わりつつある。

サル、シカ、イノシシなど問題とされている動物も増えてきている。いかに自然と向き合っていくか、新

たな問題も発生している。独りよがりにならず、全体のバランスを考えて行かなくてはならない。

都会の人が安らげる
「止まり木」をつくらう

この傾斜地では、機械化農業などできない。そこで考えたのは、コンピュータの普及や交通機関の発展によりライフスピードが年々速くなり、人々の心がついて行けず、イライラ感や、生活の中での充実感の持てない人々が多くなりつつある。

心が安心できる、夢ふるさとを作ろう。都会の人々の「止まり木」みたいな所を作ろう。そう考え続け、事業を展開している。

山々は、花に覆われ、人々の笑い声がこだまする、そんな所に一歩ずつ近づいてきたかな、と思っている。これからも、山々と住む人々の心に花を咲かせ、心を休める、そんな地にしたいと考えている。



桜と菜の花



課外授業



イベント野豚の丸焼き

江崎貴久氏

エコツーリズムで感幸のまちへ！ —旅館業とエコツアー事業で地域を元気に—



海島遊民くらぶ代表

鳥羽市は伊勢湾の入り口に位置し、古くから海の玄関口として、さまざまなお客さまをお迎えしてきました。私はそこで小さな町中の宿海月の女将をしながら、鳥羽の島の自然や漁村文化町をフィールドに、エコツアー会社「海島遊民くらぶ」を経営している。

自分の個性を生かし、仲間の個性も生かすことで、「チームワークを大切にすること」を実現し、全員が会社経営と地域経営の感幸を養い、ワークライフバランスと会社の生産性を一人ひとりがバランスを取って、運営している。

ツアーでは、女性のきめ細やかなガイディングが企画にも、おもてなしにも生かされ、島や漁村文化や自然を楽しむ、オリジナリティあふれたガイドが実施されている。

地域貢献度の高いビジネスモデルとして、日本型のエコツーリズムを行っているが、その行動指針を「お客様・自然・住民・ガイド、四者に優しい利用の工夫」とし、観光を超えた「感幸」（幸せを感じる）をミッションに、活動を広げている。

スタッフ全員が会社経営と地域経営の感幸を養う

海島遊民くらぶには現在、私を含め五人の女性常勤スタッフ兼ガイドと、五人の非常勤スタッフが所属。

島民や漁民との関わりを通して地域への還元を目的の一つにしているので、渡船やお弁当、お風呂の利用や干物などの海産物購入など、島民に少しでも利益が出るよう心がけている。お客さまには、島人との交流や産品を通したお金では買えない心

のやり取りが感動となっている。

しかし、集客交流の効果の影で、地元の自然や暮らしにどんどん踏み込んでいけば、本質が壊れてしまう可能性もある。そこで、負荷を避けるために自主ルールを設け、鳥羽磯部漁協に提示するとともに、環境保全と環境教育の為に収益の一部を寄付したり、魚貝の密漁のパトロールをしたりして、直接的なフィールドの保全活動も行っている。

その他、地域保全の持続的な啓発のため、子どもたちへのキッズクッキングや、しまっ子ガイドの育成事業を実施して還元している。

エコツーリズム推進協議会で町の循環にも取り組む

二〇一〇年、海島遊民くらぶの一組織の動きから、地域全体の組織に発展し、鳥羽市エコツーリズム推進協議会が発足。ここでは町の循環をテーマに取り組んでいる。

その一つが、海に面した山々で放置されたウバメガシの間伐と利用の循環ビジネスモデルである。昨年、鳥羽で初めて海を守るための林業としてODAWA創林株が設立され、間伐したウバメガシで、まずは薪作りを始めた。

一方、協議会でマーケティングを行い、地元企業の有限会社伊勢福（おかげ横丁）と、まるてん有限会社（波切節の製造販売）で購入していただいている。

協議会では、地方での問題は地方での必要性和捉え、それが地方でのビジネスチャンスまたは、企業のCSR＝民間資本による公益事業と認識し、このような地域循環における問題を「観光」という手法を使って改善するモデルを模索する場も担っていく。そして、自身の中で、本当の「感幸」の持続可能性を高めていきたい。



ようこそ管島へ



海辺で遊ぶ子どもたち



修学旅行生らに解説

十和田バラ焼きゼミナール

「バラ焼き」が地域の宝に
—観光、商工業の活性化に貢献—

十和田バラ焼きゼミナール 舌校長

● 畑中宏之

青森県南東部に位置する十和田市は、十和田八幡平国立公園内の雄大な景勝地十和田湖、奥入瀬溪流を有し、江戸後期の新渡戸氏三本木開拓により区画された市街地の形成とともに、生産量日本一を誇るニンニクや長イモ、ゴボウ等の生産が盛んな田園都市である。

「バラ焼き」とは、牛バラ肉と大量の玉ねぎを醤油ベースの甘辛いタレに絡め、鉄板で豪快に焼きしめる十和田市民のソウルフードだ。

新幹線全線開業に向けた
観光ワークショッップが端緒

そのボリューム感と香ばしい風味、肉の旨みがたっぷり凝縮した玉ねぎが絶品で、ご飯やお酒が進むことから、多くの家庭や飲食店で親しまれている。

「バラ焼き」によるまちおこしの

活動の始まりは、平成二十年に行つた観光ワークショッップである。

平成二十二年十二月の東北新幹線全線開業に向けて、郷土の食材を活用したメニューの発掘と開発を目的に、郷土料理や特産品などの名前が挙がる中、地元で食されている「バラ焼き」に地域資源として注目し、活性化の可能性を探ったのがきっかけであった。

当時、B級ご当地グルメの祭典「B-1グランプリ」の存在を知り、主催する愛Bリーグ事務局長の俵慎一氏を講師に招いて勉強会も行い、検討会に参加した市民有志（商工会議所青年部メンバー、市職員、会社員、大学生など）が同年十二月に「十和田バラ焼きゼミナール」を結成し、「B-1グランプリ」の参加が

十和田の知名度を高める近道…と考え、活動を開始した。

手始めに市民へのアピールと市場調査を兼ねた「バラ焼き博覧会」を市内で開催。提供店の協力を得て、商店街で二千食を振る舞い、予想を上回る評価を得られ、自信をもった瞬間であった。

また、「B-1グランプリ」発祥の八戸市で、食によるまちおこしに取り組む八戸せんべい汁研究所の方々から助言をいただき、人目を引きつける手法を検討した結果、人気漫画「ベルサイユのバラ」になぞらえたイメージ戦略が生まれた。

バラ焼き店には
多くの観光客が

それと並行して、バラ焼き提供店の協力体制の構築にも取り組み「十和田バラ焼き店主会」を組織し、のぼりを掲げるとともに、店の紹介と観光名所を盛り込んだマップを制作

した。

バラ焼き店には、多くの観光客が訪れるようになり、提供店も活動開始時より二倍に増え、現在では八十店舗を数えている。

昨年行われた「B-1グランプリ厚木大会」で八位入賞の結果は、市民に「バラ焼き」の価値を気づかせ、地元への愛着や郷土意識を高め、今では自信をもってオススメできる郷土料理の一品となっている。「バラ焼き」を通じての活動が着実に成果を見せ始めているところである。

今後も、現状に甘んじることなく活動を継続的なものとし、最終的には「バラ焼き」の故郷である韓国、そしてシルクロード（いばらの道）を進み、フランスのベルサイユ宮殿の前で「バラ焼き」をPRし、十和田を世界に発信することが目標である。皆さまでに「ラビアンローズ」バラ焼きでバラ色の人生を！



地域づくり総務大臣表彰での活動発表



B-1 グランプリ in 厚木



十和田バラ焼きゼミナールメンバー

大型子ども紙芝居で社会奉仕 —地域の老人会や小学校などで公演—



代表 ● 古屋由美子

山梨県の東部に位置する山梨市は、幾重にも重なる山並みの南空に霊峰・富士、東には際立つ白さの大菩薩峰、三県の分水嶺である甲武信ヶ岳から流れ出す笛吹川が、街の中心を流れる自然豊かな都市である。

童話や昔話など十本の演目

この山梨市の一角。ブドウ、桃などを栽培するなどらかな丘陵の果樹地帯に、小さな集落がある。子どもたちが世界に平和を発信している「大型子ども紙芝居さくら座」のホームグラウンドである。

平成元年。ママさんバレーチームの監督をしていた私が、長男の妻を試合に出すために子守を受け持ち、カレンダーの裏面に絵を書いたりしていた。そのうち別の選手の子どもも預かるようになり、子どもたちに絵本を読み聞かせ、紙芝居を見せた。

それが発展して、大型紙芝居を作り始めることになった。休日には皆で作った大型の紙芝居とぬり絵を持って、福祉施設などを訪問した。

講演後の交流会で、お年寄りの膝に抱っこされ優しさを共有する貴重な体験が、子どもボランティアグループへとつながった。現在は、制作中の紙芝居のほか、十本の演目があり、保育園・小児病棟などでは楽しく童話や昔話を上演している。

また、この地区で三百年前の疎水に尽力した先人たちの偉業をたたえるため、お年寄りの話や現地見学の重ね、大型紙芝居に仕上げて、現在の果樹地帯への「勇気ある貢献」を人々に伝えている。他地区からも上演依頼がある。

講演後の交流会で、お年寄りの膝に抱っこされ優しさを共有する貴重な体験が、子どもボランティアグループへとつながった。現在は、制作中の紙芝居のほか、十本の演目があり、保育園・小児病棟などでは楽しく童話や昔話を上演している。

さくら座メンバーは、地域の多くの人たちに育てていただいた。二十二年間、約九十人の卒業生を送り出し、新入生を迎え、学校にも家にもない学年を越えた集まりを大切に創り上げた。

平和を訴える演目は三本あり、生命の大切さを上演する時には、観ていただいた人たちの涙に「自分たちの思いが伝わった」と実感する。

原爆の犠牲となった娘と母の話^①を長崎で上演

平和の作品では、長崎市で原爆の犠牲となった娘と母の話「かよこ桜」の上演を重ねるうち、現地長崎での上演を夢見るようになった。応募した大賞を得て、受賞の賞金で八月九日十一時二分、長崎で上演した。紙芝居を披露する夢が叶い、一層の勇気をいただいた。

そして、再び長崎上演が決まった。交流のある在インドの日本人僧侶から、原爆犠牲の子どもたちの魂を慰める祈りの仏像をかよこ桜の元へ託された。「世界平和」を呼びかける子どもらに共感した長崎市長から



●●●



●●●

「長崎平和記念式典」への出席を要請され、感動の長崎上演となった。

東京からは、日本母親大会東京大会での上演依頼もあり、約三百人の母親たちは子どもたちの熱意に感涙し、主催者から「戦争の悲惨さを子どもが継承していくことに意義がある」との評価をいただいた。

環境保護活動なども含め約一年間の活動を、山梨放送が教育番組「さくら座は満員御礼」として制作したが、これがテレビ朝日系で全国放映され、大反響を呼んだ。

さくら座を巣立った七十余人の子どもは、地域活動に誇りを持ち、村を見つめ、卒業後も何かの形でさくら座の活動を支援し続けている。

これらは夢を育む地域活動の成果であり、そのボランティア精神は連綿と継がれている。さくら座の motto である「明るく楽しく仲良く」を、今後も大切にしていきたい。

ものづくり体験で観光誘客を図る

体験型観光商店街推進事業の取り組み



八幡平市産業部 商工観光課長

● 高橋 一夫

財団法人地域活性化センターは、活力ある地域づくり支援事業の一環として、主として中心市街地において自主的・主体的に実施される商店街の活性化に向けた活動を支援している。今回、平成二十一年度に参加事業を活用した岩手県八幡平市の取り組みを、同市の商工観光課長 高橋氏にご紹介いただく。

(業務第一課)

岩手県の北西部に位置する八幡平市は、「^{みのり}農と^{ひかり}輝の大地」を市の将来像に掲げ、平成十七年九月に西根町、松尾村、安代町が合併して誕生した。豊かな自然と交通の利便性に恵まれ、北東北三県のほぼ中心に位置する。

生産量日本一のリンドウをはじめ、稲作、ホウレンソウなどを中心とした農業が盛んで、水と空気が育んだふるさとの味覚がいっぱいである。

一方、県内最高峰の岩手山、十和田八幡平国立公園、オールシーズンリゾートの安比高原などの観光資源

が四季の輝きをもたらす。岩手山の裾野には、国の特別天然記念物に指定されている焼走り熔岩流がある。固まった熔岩流の上を歩くことができる観察路では、黒い大地の向こうに緑の岩手山という独特の風景が楽しめる。

七時雨山から田代平高原に広がるグリーンフィールドは「新日本百名山」に選ばれ、トレッキングファンの人気が高い。

豊富な観光資源はあるが…

十和田八幡平国立公園には、原生林の中に火山湖の八幡沼や五色沼が

点在し、眼下には火山活動が生み出した壮大なパノラマが広がる。

ブナやカエデが生い茂る溪流沿いの松川温泉は歴史ある名湯で、露天風呂からの眺めも絶景だ。源流かけ流しの乳白色の湯も豊富である。八幡平温泉郷では「マグマの湯」と呼ばれる、混じり気なしの硫黄泉を味わえる。

安比高原は、ブナの森と草原が優しく、グリーンシャワーとさわやかな風が心地よい。ベースエリアはオールシーズン楽しめる滞在型リゾートを演出する。冬は良質のパウダースノーと日本一のナイターゲレンデがスキーヤーを魅了する。

このように国内屈指の観光資源を有する本市においても、景気の低迷や観光ニーズの多様化などを背景に、観光客は年々減少し、ピーク時の平成八年には四百八十八万人あつ

た入り込み数は、平成二十年には三百四十万人にまで落ち込んでいる。

また、少子高齢化などを背景とした過疎化や、交通網などインフラ整備の影響と近隣の大規模店進出による消費者の流出などが起因して、地元商店街は衰退傾向にあった。

伝統的な製造小売店が多い商店街の特長を活かす

そこで、荒屋新町商店街では伝統的技術が息づく製造小売店が多く構える特長を活かし、ものづくり体験を体験型観光に成長させるため「活力ある地域づくり支援事業（活力ある商店街づくり助成事業）」を活用してユニークな取り組みを行った。

題して、「ぶらっと一日体験工房」。一日ゆったり体験工房で過ごし「ぶらっと」してもらおうとのネーミングで付けられた。

この商店街は古くから製造小売店が多く、伝統や技が残ることから、ものづくりの体験を通じて手づくりの良さや職人の技、安全で安心な食品に触れてもらい、商店街への誘客を目指した。インスタクターは、商店街の事業主や高い技術を持った職人たち。

花瓶敷き、マウスパッドに利用できるミニ畳、職人からコツを教わる和菓子「ヨモギのがん月」、おいし



マウスパッドにも利用できるミニ畳



ヨモギのがん月づくりでは菓子職人がコツを伝授



色漆で思い思いの柄を箸に絵付けする体験者

最終的には二十
七人となった。
今後は、県都
盛岡市からの誘
客をターゲット
とし、商店街に
ある温泉施設な
どと連携しなが
ら、日帰りツ
アーの充実や若
者から老人まで
楽しめる団体向
けのプランを造
成しようという意
気
込んでいます。

い漬物ができる三五八（漬物の素）と麴を使ったプロの甘酒、豆をすり潰してつくる本格的な寄せ豆腐と豆乳手打ちうどん、漆箸の絵付け、拭き漆皿の漆絵付け、本格的な手打ちそば、勾玉づくりやナラや木の実や野菜などの炭を使ってつくる飾り炭——などが体験できる。

各体験工房は、自社の工場や工房内を利用している。職人たちがものづくりにいそしむ空間で体験することにより、雰囲気味わえると好評で、訴求を高める効果を狙った。ミニ畳では、大きな作業機械やイグサが香る製品、材料が置いてある場所で行うことで、あたかも職人になっ

た気分が味わえる。

安比塗漆器工房でも、職人が茶碗などに漆を塗る作業空間と同じ場所で色漆の絵付け体験ができる。漆や木工の香りが立ちこめ、一筆一筆思い描いたデザインになるよう丁寧に箸や皿に描くことから我を忘れ、雑念のない時間を過ごし、癒し効果もある。

商店街の経営姿勢は、小ロット生産、高品質を目指す企業が多く、安全・安心をモットーとする。その経営姿勢を体験工房のメニューに取り入れた。麴屋もとみやでは、安全・安心で良質の材料を使用した手前味噌づくりが体験できる。自社工場で

使用する大豆、麴、塩、水のみを混ぜ合わせ、一年寝かせて出来上がる。
**マスコミと連携した
事業宣伝やHPを活用**

本事業の普及のため、マスコミと連携した宣伝方法も取り入れた。事業趣旨と普及活動の理解を深めてもらうため県内のマスコミ各社を訪問し、地域活性化の取り組みを訴えた。テレビ局では、ニュースや番組の中で体験工房を紹介してもらい、参加募集のほか、地域ブランドとしての定着を目指した。

また、ホームページにも力を注ぎ、体験工房の普及DVDをHPで紹介する仕組みをユーチューブに投稿す

ることによって実現した。観光の嗜好は、「見る」から「行う」ことに変化している。その土地の特徴である資源に触れ、共感する傾向が高まっているが、PR活動としては文章や画像だけでは弱く、動画を使い体験を連想できる内容とした。インターネットから閲覧できることで、世界中へ発信することができる。

HPや普及DVD、パンフレットを旅行客が目にする個所に置くことから、宿泊のオプションとして利用する人も増えている。平成二十一年度の体験工房の利用者は、十企業十一体験で、三百七十五人。このうち県外からの利用者も月ごとに増え、

新発田市は、白砂青松と称される海岸、とちだいら椽平サクラ樹林を有する山岳地帯、かつて長堤世界一とされた桜堤を有する加治川を水源とする大地が広がる自然豊かな新潟県北部の中核都市です。

江戸時代には10万石の城下町として栄え、国の重要文化財である新発田城をはじめ、しだれ桜が咲き連なる寺町通り、藩の下屋敷であった美しい回遊式庭園「清水園」、歴史ある神社仏閣などがあり、歴史を感じながらまち歩きができる城下町風情を残すまち並みとなっています。

市最大の祭りである『城下町新発田まつり』では、海上花火を皮切りに様々な行事が行われ、帰り台輪の男達が熱い新発田の夏を締めくくります。まつりの華「台輪」は、約280年前より大切に伝承されており、山車や法被や振る舞いにも各々独自のものがあり、見どころの一つとなっています。

もっと美人になれる温泉として全国的に有名な『月岡温泉』は、全国屈指のイオウ成分含有量を誇り、エメラルドグリーンの湯は県内外の多くのお客様に親しまれています。

近年では、ふるさとの地域資源と食を活かした「食の循環によるまちづくり」が展開され、特産のアスパラガスを活用した和菓子やカレーなどの開発も進んでいます。

魅力ぎっしりの新発田にぜひお越しください！



■全国的にも珍しい三匹の鯨を配した「新発田城三階櫓」



■男衆が熱い心意気をぶつけ合い街中に山車を曳き出す「帰り台輪」



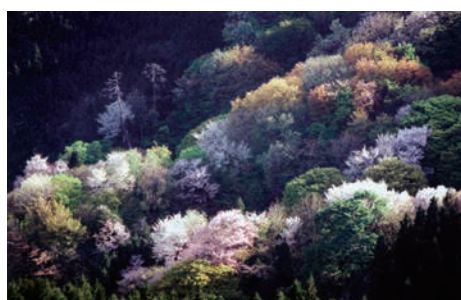
■「もっと美人になれる温泉」として全国的に有名な月岡温泉



■アスパラみどりカレー



■かつて長堤世界一といわれた、復元の進む加治川の桜堤



■国指定天然記念物の大峰山とちだいらサクラ樹林



■新潟県内一の生産量を誇る「アスパラガス」



■白砂青松の美しい海岸で咲き乱れる大輪の海上花火



和歌山市長 ● 大橋 建一

市民みんなで町の魅力を磨く

和歌山市は県の最北西に位置し、市中心部にそびえる和歌山城の連立式天守閣がシンボルの町です。

江戸時代は徳川御三家紀州五十五万五千石の城下町、明治以後は、ものづくりの伝統に支えられた工業都市として栄える一方、大阪近郊の風光明媚な行楽地としても人気でした。西は紀伊水道に面して海岸線が約三十キロ続き、加太・友ヶ島、磯ノ浦、そして和歌の浦一帯、紀三井寺などの景観スポットを持つ夕日の美しいまち、いわば「日本のウエストコースト」です。

南部の和歌の浦一帯は千四百年前から景勝地として知られ、山辺赤人、聖武天皇、菅原道真、豊臣秀吉、松尾芭蕉、夏目漱石ら各時代の代表的人物が訪れ、青松白砂の海岸美を堪能しました。

明治以後、太平洋戦争を挟んで昭和三十年代までは観光地として大いににぎわい、昭和二十五年には毎日新聞社選定の「新日本観光地百選」海岸の部一位に選ばれました。その後、瀬戸内海国立公園に編入され、新婚旅行や団体旅行の適地として多くの人が訪れました。

しかしながら、高度成長期を経て日本人が豊かになり、道路交通網が発達し始めた昭和四十年代に入ると、新婚旅行先は宮崎県をはじめとする九州へ、海外へと変わり、観光地に不可欠な温泉に恵まれていなかったこともあって、和歌の浦一帯は徐々に衰退し、最盛時四十軒以上あった観光旅館は十軒足らずに減り、和歌の浦一帯を三百六十度見渡せる高津子山（章魚頭姿山）の展望台へと登れるロープウェイは廃止されてしまいました。

とはいえ、和歌山の海の魅力は今も健在です。和歌の浦の南に広がる和歌浦湾は、平成六年に開催された国際リゾート博覧会の時にできた和歌山マリーナシティという人口島があり、周辺はマリンスポーツのメッカで、セーリングのナショナルトレーニングセンターに指定されています。

また、和歌の浦地域には和歌浦、田野、雑賀崎の三漁港があり、特に海から見る雑賀崎の漁村の姿は地中海を思わせる素晴らしい景観です。港には地域ブランドのシラス、足赤えびなど多くの水産物が水揚げされ、朝市が

開かれる時は県外も含め多くの人が集まります。

三百九十年前、紀州徳川家初代藩主頼宣公が父家康公を祭って建てた紀州東照宮の祭りとして始まった和歌祭は今も、地元の保存会の努力で、若い世代へ、子どもへと受け継がれ、往時の勢いを徐々に取り戻しています。

また、マリーナシティをゴールに十年前から始まった「和歌浦ベイ馬拉ソンWiiジャズ」は、沿道で奏でられるジャズを聴きながらベイサイドを走る魅力と、ランナーを支える多くのボランティアの力で、一万三千人が参加する近畿最大の市民馬拉ソンに成長しました。

和歌の浦は昨年、国の名勝に指定され、新たな再生のチャンスを迎えました。これは、こうした様々な取り組みの積み重ねによるもので、地域を愛し、地域のために自主的に活動を進め、世代を超えて努力をしてきた地元住民の力があつたからこそ実現したと思っています。新年度に向け和歌山市は「市民力」「基盤力」「観光力」の三つに磨きをかけることをテーマに掲げています。

「基盤力を磨く」は道路、下水道など都市基盤整備が遅れている和歌山市では今も市民生活向上に不可欠な事業で、東南南海地震がいつ来てもおかしくない時代です。防犯面からも一層の充実が必要と考えています。

「観光力を磨く」は、和歌の浦はもちろん、加太・友ヶ島、そして市中心部の堀川などにかすかに残っている城下町の風情など、「磨けば光る」素晴らしい素材を市民みんなの力で磨きあげて、食と景色の観光都市としてリニューアルしていくという思いを表現したものです。

そして、「みんなで磨く」ために必要なのが「市民力」です。和歌山市は大都会に比べると地域コミュニティが今もすっかりした町で、各地区に子ども見守り隊も編成されています。

そうした伝統を次世代につないでいくために、子育て環境を整えることに力を入れる一方、市民グループから行政と市民の協働事業の提案を募集し、優秀作に予算を付けるなど、市民の「やる気」を引き出す取り組みを行い、「市民力」の向上に努めています。

地域活性化ガイドブック 「ICTの利活用による地域づくり」



政府は、平成22年5月に「新たな情報通信技術戦略」を発表しました。その重点戦略の一つに「地域の絆の再生」がありますが、これは遠隔医療、児童・高齢者見守り、生涯学習支援、地場産業振興、地域間交流など、あらゆる分野でのICTの利活用により、地域の活性化を図ろうとするものです。

全国の地方自治体においても、地域課題の解決や地域振興のため、自治体主導、民間主導、官民協働等、様々な実施形態を採りつつ、ICTを利活用した様々な取り組みが行われています。その領域は、新産業の創出や中心市街地活性化、農村振興、地域コミュニティの再生、さらには地域医療の支援にまで及んでいます。

こうした状況を踏まえ、当センターはこの度、ICTの利活用による地域づくりを推進するための一助とすべく、「ICTの利活用による地域活性化」に関して、先進的かつ特徴的な取組の事例や、関係省庁の施策等を紹介・解説するガイドブックを取りまとめました。

このガイドブックでは、「政策解説」としてICTの利活用に向けた国の政策を「特集編」として、全国の自治体による先駆的・特徴的事例を紹介しています。

●価格500円（税込・送料別）

●お問い合わせ先 総務部総務課 TEL：03-5202-6132

通信センター

平成22年度 地域活性化事例集 ～シニア世代との協働による地域づくり～

現在、わ国では、少子化が進行する一方、多くのシニア世代が退職を迎えたことで、年金・医療・福祉等の社会保障、地域経済の維持などさまざまな面で国民社会に影響を与えています。

地方公共団体においても、豊富なビジネス経験や実践的な専門知識・技術、広い人脈など多様な知的資産を有するシニアの世代の方々に活躍いただき、地域課題の解決に向けてともに取り組むことが重要となっています。

そこで、当センターでは、地方公共団体とシニア世代の方々との協働による地域づくりの取組事例を取りまとめ、事例集を作成いたしました。

全国の市区町村における121事例について、シニア世代に注目した理由や協働に至った経緯、取組の内容、事業の成果、今後の課題と展望等を中心に、福祉・環境・産業・観光・歴史・文化などの分野において、シニア世代の方々が有している能力や知識などを、どのように発揮し、地域づくりに貢献されたのかについてまとめています。

●価格2,000円

（税込み・送料別）

●お問い合わせ先

総務部総務課

TEL：03-5202-6132



有楽町・ふるさと情報プラザの閉鎖と移転のご案内

有楽町・ふるさと情報プラザは平成23年3月31日(木)をもちまして閉鎖し、日本橋プラザビル1階に移転し、「ふるさと情報コーナー」として4月11日(月)にオープンすることとなりました。(予定)

新しい場所は、(財)地域活性化センターと同ビルにあり、JR東京駅北口より徒歩5分と大変便利な場所になりますので、ぜひお気軽にお立ち寄りください。なお、移転後も有楽町・ふるさと情報プラザ同様のパンフレットの品揃えとなります。

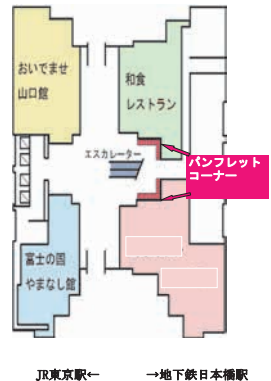
地方自治体の皆様には、従来からごさいます日本橋プラザビル屋外スペースを展示即売やキャンペーンなどに無料でお使いいただけますので、引き続き、ご活用をお願いいたします(なお、平成23年度利用申し込みについては、締め切られました)。

日本橋プラザビルのご案内につきましては、図のとおりです。

【地域活性化センター アクセス地図】



【日本橋プラザビル1階平面図】



【住所】
東京都中央区日本橋2-8-4 日本橋プラザビル18階

平成23年4月11日(月) 日本橋プラザビル1階
移転 オープン！

ふるさと情報プラザ

平成23年3月31日 閉鎖

100-0006 東京都千代田区有楽町1-7-1 有楽町電気ビルディング南館1階
TEL: 03-3284-0855, FAX: 03-3284-0755 開館時間: 11時～19時、土・日・祝祭日は休館
ホームページURL: <http://www.chiki-dukuri-tyakka.or.jp/>

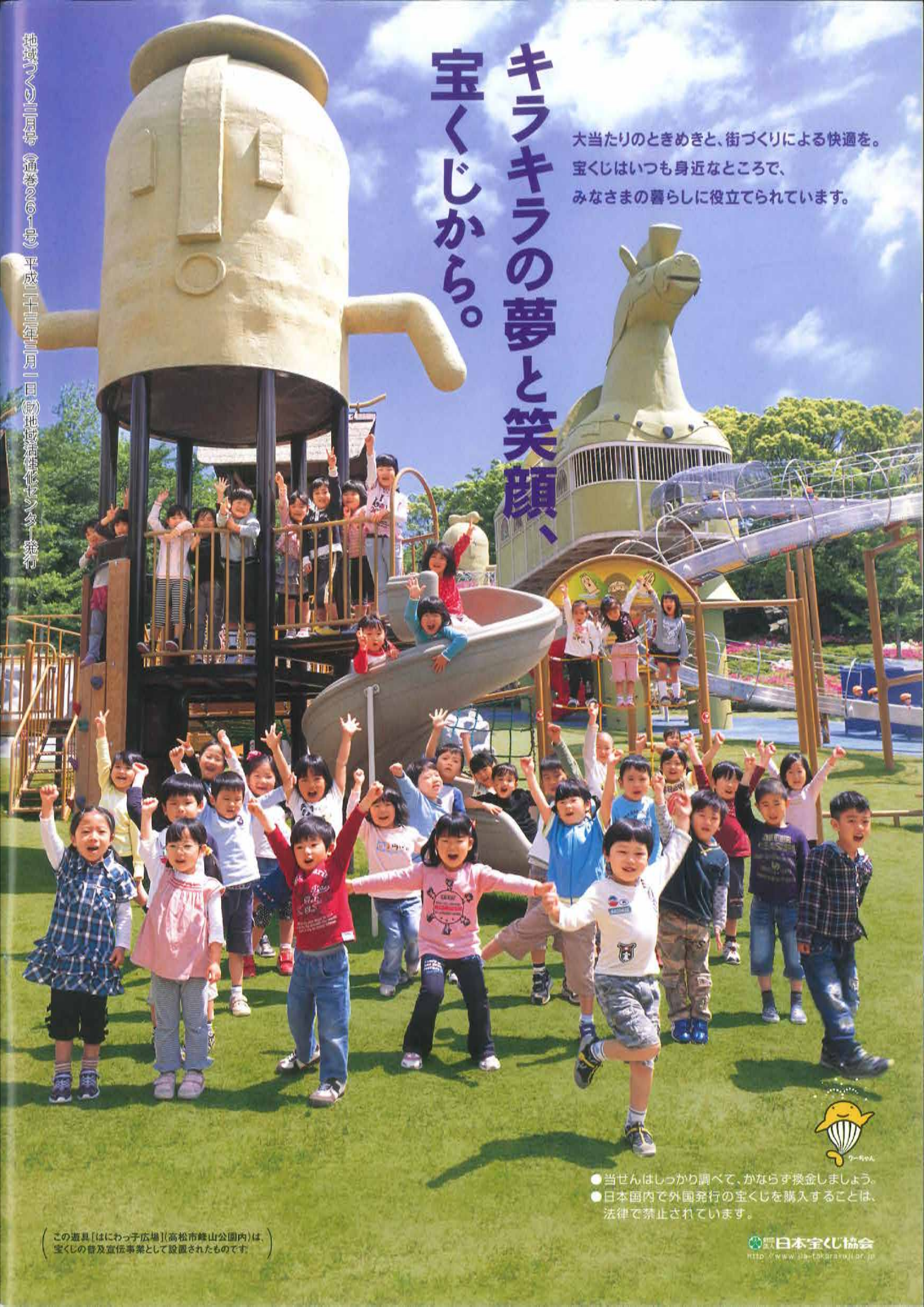
「地域づくり」編集委員の皆さん、お疲れさまでした！

▼この一年間の取材・編集にあたり、お力添えとご厚情を賜りました全国の皆さまに、心より御礼申し上げます。(桑名市、土井) ▼月刊「地域づくり」には、多くの方にご協力いただき、深く感謝いたします。今後ともよろしくお願い申し上げます。(上尾市、大上) ▼様々な事例に触れる中で、熱意ある活動を知ることができました。本当にありがとうございました。(松山市、竹田) ▼団体探訪の取材では、地域への熱い思いが伝わってきました。ご協力いただきありがとうございました。(和歌山市、本間) ▼取材・編集を通じ、様々な取組と携わる方々の思いを感じることができました。ありがとうございました。(松江市、浜浦) ▼全国各地で地域づくりに取り組む方々の取材を通して、自分にとって得るものがたくさんありました。(高知県、埴田) ▼まちづくりへの情熱ある方々からお話を聞くことができ、とても楽しかったです。大切なのは、やはり郷土愛！(いわき市、大津) ▼地域づくりのための情報発信によって、すこしでも会員のみなさまのお役に立てたと思います。(広島県、村上)



キラキラの夢と笑顔、 宝くじから。

大当たりのときめきと、街づくりによる快適を。
宝くじはいつも身近なところで、
みなさまの暮らしに役立てられています。



- 当せんはしっかり調べて、かならず換金しましょう。
- 日本国内で外国発行の宝くじを購入することは、法律で禁止されています。

(この遊具【はにわっち広場】(高松市峰山公園内)は、
宝くじの普及宣伝事業として設置されたものです。)

日本宝くじ協会
<http://www.jia-tokorakuji.or.jp>